

日中戦争下北京における中国人女子高等教育の試み ： 東本願寺系覚生女子中学校について

著者	木場 明志
雑誌名	真宗文化 ： 真宗文化研究所年報
巻	8
ページ	48-107
発行年	1999-07-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000741/

日中戦争下北京における中国人女子高等教育の試み

—東本願寺系覚生女子中学校について—

大谷大学教授

木場明志

はじめに

- 一 北京覚生女子中学校設立のころの時代状況
- 二 覚生女子中学校設立の背景
- 三 開校の準備
- 四 開校とその後経過
- 五 中国の教育事情から見た意味
- 六 日本への留学生派遣
- 七 さらなる専門教育への志向
- 八 姉妹校としての光華女子学園
おわりに(覚生女子中学校跡地の現況)

はじめに

一九九〇(平成二)年刊行の『光華女子学園五十年史』は、巻頭の「緒言」の一節につきのようにいう。

昭和十三(一九三八 筆者注)年の春、東本願寺の故大谷智子^{さとこ}裏方(法主夫人)が中国へ慰問旅行に行かれたのが機縁となり、御裏方の仏教精神による女子教育を京都の地に具現せんとする御発願のもと、有縁の方々の御支

援により、高倉（当初は六条高倉に仮校舎が建てられた）において呱呱の声を挙げたのが本学園であります。

そして、「序章 学園創立前史」では、中国北京での覚生女子中学校設立の由縁を述べて光華女子学園創立の契機に繋ぐ。要約すると、東本願寺大谷光暢法主が一九三八（昭和一三）年一月一三日から中国華北・華中へ戦地慰問に出発し、智子夫人も少し遅れて一月三〇日から約一か月にわたって慰問に旅立った際に、中国側女性による仏教を通じて日中親善気運が非常な昂まりをみせて、天津・北京に日華仏教婦人会が結成されたという。その北京での結成会合において、大谷智子は北寧鉄路局長で故人となった陳覚生の夫人である陳鮑蕙に出会い、夫の遺産で仏教精神による女学校を建てて東本願寺に経営を委ねたい、と持ちかけられたのである。話は進んで同年九月一七日には北京市皮庫胡同（ビークフートン）の地に陳覚生の名を記念した覚生女子中学校が誕生して大谷智子は名譽校長に、陳鮑蕙は校長に就き、京都の大谷中学校から出雲路善尊が学監（事務等責任者）として赴任するなど、日中合作による女子教育がスタートした。かくて、中国人女子を中心に在留日本人女子を加えて教育が行われ、のちには付属小学校・幼稚園も開設されたが、日本の敗戦によって閉校に追い込まれた、と概略を記している。

同書は続く「第一章 学園の創立」に次のようにいう。

覚生女子中学校の創立についての御裏方と陳鮑蕙女史の会談において、仏教精神による女子教育の重要なことが話しあわれた。帰国された御裏方は、覚生と同じく、仏教精神にもとづく女子教育の場を京都にも設けたいと願われたのであった。

こうして一九三九（昭和一四）年七月二八日に財団法人光華女子学園の設立申請が文部省に提出され、九月一五日付での文部省認可、さらに九月二〇日付京都府認可を経て、翌一九四〇（昭和一五）年四月一日の光華高等女学校入学式（開校式）に至る。学園理事長は大谷瑩誠（光暢法主の伯父）、総裁として大谷智子が就任し、校長には阿部恵水（元真宗大谷派宗務総長、内事顧問、宗務顧問）が就いて、修学年限を五年とする光華高等女学校の教育は開始

された。太平洋戦争期間中に付属保育所・光華女子専門学校が付設され、戦後においては中学校・高等学校・女子短期大学を設立して一九五一(昭和二六)年に学校法人光華女子学園となり、光華衣服専門学院・光華女子大学・光華幼稚園を併設して現在に至っている。

この間、覚生女子中学校との直接の関係といえ、一九四二(昭和一七)年の二学期に覚生女子中学校の優秀生二名を留学生として光華高等女学校が受け入れていることであり(『光華女子学園五十年史』四四―四五ページに記述)、内一名は一九七〇(昭和五五)年の学園創立四十周年記念式にも来日参加したとある。のちにも触れるが、中国人留学生受け入れのことは光華高等女学校設立時からの計画であり、覚生女子中学校側に校則による規定はないものの、成績次第で姉妹校である日本の本校への留学の道が開かれているという中国での触れ込みがあったものとみられるところである。

さて、光華女子学園とは設立において上述のような関係があるという北京覚生女子中学校について、この小稿ではその沿革や推移、また中国女子教育の事情、日中戦時下の政治的外交的事情、東本願寺中国伝道事業との関連などの若干を、資史料に基づいて論述したい。幸いにして、覚生女子中学校の設立および経過などに関して、その設立母胎となった東本願寺の教学課に報告された資料(以下、『旧東本願寺教学課資料』と称する)の幾分が残存し、現在では大谷大学図書館所蔵となっている。ここでは、多くそれによりながら、また大谷智子による回顧文や覚生女子中学校の日本人同窓生による回顧録も参照して叙述していきたく思う。

一 北京覚生女子中学校設立のころの時代状況

中国北京における覚生女子中学校の設立までの経緯については、当事者の大谷智子によって設立間もない一九四〇(昭和一五)年一月にまとめられた随筆集『光華抄』に、「覚生女子中学校」という一章があって触れられている。

また、蘆溝橋事件後の日本軍の北京占領(一九三七年七月三〇日)を契機として北京に開かれた東本願寺華北開教監督部の主事として赴任し、かつ直接に覚生女子中学校の開設事務を担当した菊池景京は、同校日本人同窓会のためにまとめた『宗門開教資料―北京覚生女子中学校―』(一九七九年刊)において、覚生女子中学校開設を東本願寺中国伝道事業の一環に位置づける。『旧東本願寺教学課資料』群には『昭和十三(一九三八)年五月 北京覚生高等学校創設概要』という直接史料があり、また『民国三十二(一九四三)年六月 北京覚生女子中学校概況一覽』と題した中国語印刷物があつて、当該校に関する多くの情報を伝えてくれる。さらには、華北開教監督部から六か月ごとに行われた東本願寺への定期報告にも、当該校による日々の出来事までを記した報告史料が含まれていて貴重である。そこで、これらによって、まずは設立のころの時代状況を尋ねてみようと思う。

まずは、当時の歴史的状況を把握するために、日中政治略史を記しておかなねばならない。周知のように、一九三一(昭和六)年九月一八日の柳条溝事件を契機に満州事変が発生し、その国難に対処するために翌三二年一月には蒋介石率いる南京政府と汪兆銘率いる広東政府とによる合作の南京国民党政府が樹立される。本来は関東省守備隊であつた日本の関東軍が中国東北部(満州地域)を占領し、同年三月一日に満州国建国宣言を行い、長春(新京と名を改める)に日本の傀儡政府を設置して満蒙全域の支配を夢に見、一方で、華北分離自治を標榜して熱河・華北に侵攻を試みていった。後者がいわゆる北支処理要項と称される政策であつて、北支および隣接する内蒙古地域に展開した蒙古族独立運動に日本が加担協力する姿勢を見せたのもこのためであつた。政策遂行のために日本側には対北支(華北)再認識論が起こされ、それは侵攻作戦と表裏一体をなす日支親善提攜論を形成していくことにもなる。

そうした状況下に一九三七(昭和一二)年七月七日の蘆溝橋事件(当時は北支事変といつた)の発生があつた。日本政府が一日に関東軍および内地からの三個師団の派兵を声明したことが中国側を刺激し、国民党政府もまた華北派兵を決める。中国軍と中国国民の抗日意識の昂まりを好機と捉えた日本陸軍強硬派は、日本政府に揺さぶりをかけ

て二七日に派兵決定の断を下させ、二八日に総攻撃を開始した。こうして日中全面戦争が惹き起こされたなかで、日本軍は三日後の七月三〇日までには天津・北京（北京は当時北平といった）を占領してしまう。続いて十一月一日には日本軍は上海を占領、十二月一日には国民党政府のあった南京（国民党政府は武漢に退却）を占領する。南京大虐殺が発生するのは翌年二月までの日本軍駐留中であるのだが、南京占領によって事実上の華北地域制圧に成功したとみた日本軍は、翌一四日に北京に中華民国臨時政府と称する委員長を王克敏とする傀儡政府を擁立したのであった。この二日後、日本の対中国中央機関である興亜院が北京に新設置され、臨時政府の指導にあたったことはいまでもない。こうした状況をうけて一か月を経過した三八（昭和一三）年一月一六日の「以後、（蒋介石の）国民政府を相手とせず。」とする日中和平交渉打ち切りの近衛声明が出されるに至る。

その後、日本軍は同三八年三月二八日に南京にも行政院長梁鴻志を首班とする傀儡の中華民国維新政府を樹立し、さらに侵攻して一〇月二六日には武漢を占領。またしても国民党政府は遷都を余儀なくされて重慶に移動する。しかし、蒋介石と対立することになった国民党副総裁の汪精衛（汪兆銘）が二月一八日に重慶を脱出するに及んで、日本は反共親日の立場で対日早期妥協を主張してきた汪精衛の政治的利用を企て、汪を支援して四〇（昭和一五）年三月三〇日に傀儡の南京国民政府を成立させる。これに北京臨時政府と南京維新政府が合流させられ、日本側はこうして日本軍占領地域に樹立した南京国民政府を正統の中国統一政府（実は傀儡）と見なしていく。日本はこの傀儡政権と同年一月三〇日に日華基本条約を結び、様々な日本有利の特権を約定するとともに、中国正式政府であるとの承認を与えたのであった。

おおよその歴史的状况を略説したところで、改めて北京覚生女子中学校設立に至る時期と重ねてみよう。冒頭に記述した東本願寺大谷光暢法主の中国華北・華中戦地慰問の出發は一九三八（昭和一三）年一月十三日からで、智子夫人は少し遅れた一月三〇日からの約一か月ということであった。これを真宗大谷派機関誌『宗報』（一九三八年二月号

に日程記載)によって確かめてみれば、光暢法主の慰問は一月一三日神戸港出發で、天津・北京・承德・保定・石家莊・磁州・太原・大同・張家口・新京(長春)・ハルビン・奉天(瀋陽)・大連を経て二月二日長崎港帰着。引き続き翌二三日には長崎港から再び出發、上海・蘇州・南京・杭州を経て三月七日長崎港帰着。三月九日、盛大な出迎えのなかを本山京都東本願寺に帰山し、旅装のままに阿堂に参拝したのち、記者会見と記念報告講演会が催されたのであった(『宗報』同年三月一六月号に巡回報告の連載記事がある)。一方の智子夫人は一月三十一日長崎港出發で、上海・南京・大連・青島・天津・北京を経回して二月二日に門司港に帰着している(『宗報』同年三・四月号記事)。智子夫人の渡航目的は華中・華北における「皇軍傷病兵慰問と日華仏教婦人会提携」(『宗報』三月号)であって、そのために慰問袋一〇〇〇個・兵隊用靴下一三〇〇〇足(智子夫人手製の三〇足を含む)・包帯(これも手製を含む)・中国女性へ土産の扇子、などの荷物は七〇余箱に及び、大谷派婦人連盟代表者一名をも伴っていた。行程では光暢法主と智子夫人が途中で出会うことはなかったが、光暢法主が赴いた後に智子夫人が訪れるように設定されていて、いわばお膳立てが整ったところへ訪問する形であった。日本軍が軍事制圧した天津・北京における日華仏教婦人会設立の企てもその意味では予定のスケジュールであって、訪問日程に合わせて天津では二月一二日に、北京では同一五日に日華仏教婦人会設立大会が開催されたのであった。その会の様子は智子夫人の著作『光華抄』に余すところなく記されているが、いふなれば友好的上流婦人による貴婦人会の様相である。特に、日本が北京に擁立した傀儡臨時政府の要人の夫人とその子女を中心メンバーとする色彩の組織であったことは、同年五月一日一七日に答礼とする中日仏教婦人会(日華仏教婦人会の別称)の京都訪問を受けていることによって明確である(『宗報』同年六月号)。訪日目的は皇軍症病兵慰問・女性による仏教を通じての日中親善・日本視察・智子夫人への答礼であった。来訪者の一例を挙げれば、訪日団長は天津特別市々長夫人。以下、同令嬢・行政委員会秘書長夫人・同令嬢・北京特別市々長令嬢二名・前北寧鉄路局長令妹(陳覺生の妹)など一行は二二名。指導者の名目で中日仏教婦女会役員の平林千賀子がただ

一人の日本人として加わっていた。この平林千賀子こそが日本びいきの陳覚生の遺志を継いだ夫人陳鮑蕙と東本願寺とを仲介し、覚生の遺産による北京覚生女子中学校創設を智子夫人に持ちかけたその人であった。天津で夫と共に平林洋行と称する繊維中心の貿易商社を営んで成功していた上流界女性で、天津・北京における中日仏教婦人会の設立はひとえにこの人物の世話によって成ったという経緯がある。

日本軍による華北地域制圧とその結果としての傀儡政権成立により、現地の日本人は立場と支配の強化を求め、また親日派中国人は日本との友好をより強め、日本の主導に委ねながらも一定の社会秩序を確立することを目指したであろう。そうした双方の思惑が女性のなすべきことは何かにまで及び、かくて日華仏教婦人会が誕生し、それを介して覚生女子中学校創立にまで展開することになる。

二 覚生女子中学校設立の背景

智子夫人の著書『光華抄』所収の「覚生女子中学校」の項(一〇五―一〇九ページ)には創立について次のように記している。

満州(中国東北地域)を経て北支(華北)へ向ったときに、車中まで迎へに来てくれた旧知の一信徒婦人(平林千賀子)から、意外な一つの話がもたらされた。

大の親日家で、特に大谷派本願寺に好意と信頼を寄せておられた、北寧鉄路局長陳覚生氏は、私達の今度の慰問行が計画されてや、決定した頃から、何かにつけて便宜をはかられ、北京では自宅に泊めて下さると云ふお話までもあった方である。それにもか、はらず、此の世ではお眼にかゝる御縁がなかったのもあろうか、お互ひの期待にそむき、待望空しく、病魔に襲われて、年末(一九三七年末)に急逝してしまはれたのだった。ところがその未亡人が、夫君の死を悼むあまりに、その遺志をうけつぎ、永くその徳をしのぶすがにもと、このたび

私に会ふことが出来るのを機会に、夫の遺産を寄附するから仏教の学校を経営してもらひたいと云ふ話だったのである。

それはまことに突然の事であり、いかに生前信頼して居られたとは云へ、未知の私達へ数十万という遺産を寄附されるなどと云ふことは、あまり突飛な事のやうにも思はれたので、この婦人のお話をそのまゝに信じ込む気持にはなれなかつた。しかし、そののち、その話は他の人からも耳にするやうになり、誤伝でも一時の思ひつきでもないことがわかつて、感激してしまつた。

未亡人には、天津別院ではじめてお眼にかかつた(二月二日)。他の支那婦人達のはなやかな服装にひきかへ、夫人の灰色の袖の長い喪服が、いたいたしかつた。

北京へうつつてから(二月一五日)、女学校の話は次第に具体化して行つた。現地に於いて仏教の女学校を経営して行くといふことは、中々むづかしいことであらう。しかし、常に日華親善を希ひ、新東亜建設の礎石の一端にもなり得るならと望んでゐる私にとつて、こんな願つてもない結構な話がまたとあらうか。これこそ仏のお恵みであると喜ばずには居られない。けれど、本山(東本願寺)で経営していくとなると、本山当局者の意見も聴かねばならぬ。でこのことについては、随行の阿部(随行長阿部恵水。真宗大谷派宗務総長を三度勤め、当時宗務顧問、兼教学財団理事長)に一任することにした。

(二月)十四日の晩、北寧鉄路局長顧問をして居られる石田中佐(石田榮熊中佐、平林千賀子とは昵懇)が来訪せられた。そして今度の女学校問題が、すべて順調にはこんでゐることを話され、開校の晩には名誉校長になつてもらへるだらうかと云はれた。私は話の進み方の早いのに、驚かずには居られなかつたけれど、仏教の女学校の設立は、ほんとうに望ましいことであるし、それを望まれるのなれば、おうけ致しませうとお答へした。かうして北支の一角に誕生した女学校(一九三八年九月一七日開校式挙行)は、陳覚生氏の名を記念するために、

北京覚生女子中学校と名付けられ、初代校長には出資者陳鮑蕙女史が就任せられることになった。最初は夢のような話だと思つたのが、今や真実となつて眼前に現れたのだつた。思ひがけない女学校の誕生！ 私の夢想してゐた仏教による日華親善は、かくてその一端から実現せられることになったのである。

どうしてこれだけ早く、当の智子夫人も驚くほどの短期間に話が進んで北京覚生女子中学校の開校に至つたのだろうか。この間の事情を記すのは開校事務を担当した菊池量京（当時真宗大谷派北支開教監督部主事、兼北京別院補番）による「北京覚生女子中学校創立回顧」（『宗門開教資料—北京覚生女子中学校—』一九七九年刊、所収）である。その回顧録によると、経緯はつぎのように要約できる。

真宗大谷派（本山東本願寺）が天津に開教線を伸ばしたのは日露戦争（一九〇四—〇五年）が契機であつた。天津布教所が開設されて在留邦人への教化活動が始まり、一九〇八（明治四一）年には布教所が天津別院に格上げされた。その当時、北京にはすでに浄土真宗本願寺派（本山西本願寺）の別院が開設されており、互いに華北地域における本拠地を侵さないという不文律が自然発生的に醸成されて、一九三七年七月の蘆溝橋事件の発生までは、北京開教を夢見ながらも他宗他派との競合を避けるように努めていた。蘆溝橋事件発生（七月七日）に際し、日本の駐屯軍司令部は天津に設置されていたのであつたが、大谷派は事件の二日後に従軍僧派遣を決め、七名が天津の軍司令部からの従軍許可証を得て、八月に念願の北京に入った。日中戦争へと戦火が拡大するなかで、天津の日本軍司令部は北支派遣軍司令部と改称され、続く北京・南京の軍事制圧によつて日本軍はまず北京に傀儡の臨時政府を設置し、北京特別市幹部にも親日派中国人を擁立し、占領地行政の推進と中国政策の浸透を図ろうとした。明けて一九三八年には北支派遣軍司令部が天津から北京に移つた。

北京入りを果たした大谷派従軍僧たちは、北京別院の開設を目指して各方面に運動を展開したが、北京に置かれて中国政策の統括を担当した興亜院において文教部調査官に就いた竹田熙に対しては、たびたび訪問して中国開教の方

針について意見交換をしたという。仏教による対中国の文化工作を意見具申した様子であり、それらは大谷派随一の中国通とされた藤井草宣を中心になされた。藤井はまた、大谷派開教本部の必要性を武田に訴え、武田を介して北京特別市市長江朝宗に面会して中日仏教会結成を上申、市の旧公舎建物の一部を借りることができて、一九三七年一月二三日には北京別院（北京東本願寺）が正式に誕生するに至った。

大谷派北京別院輪番には藤井草宣が就任し、藤井は北支開教監督部主事をも兼任。中日の仏教者が参加する中日仏教会は興亜院文教部内に設置されることになり、藤井はその学会の常務理事としても活躍をみせる。対中国政策に活かせるものであれば、大谷派の提案は受け容れられる素地がここに完成したのであった。

さて、平林千賀子は天津に住んでいた実業家であった。近江長浜出身の夫、儀右衛門は代々の大谷派門徒の篤信家で、夫人千賀子もまた信仰心が厚かった。儀右衛門は大谷派天津別院の創立に門徒総代の一人として尽力したと伝え、呉服商から身を起こして身代を築いた成功者であり、夫人もまた社交上手で知られた実業家の著名人であった。平林夫人千賀子は、当時の中国財界の要人に数えられていた陳覚生夫妻とは懇意の間柄で、覚生は鉄道総裁にあたる重要な地位にある屈指の財閥であって、かつ大変な親日家でもあったという。東本願寺大谷智子の中国来訪のことを聞いて、出遭うことを心待ちにしたまま、病氣によって一九三七年一月に急逝した。陳覚生の没後に起こったのは親族間の遺産争いであつたようで、それを見るにつけて、平林千賀子が発案して親日家の覚生を精神を生かすべき事業に、遺産の一部を充てるように説得したものらしい。将来に中日両国の掛け橋となる女性の中堅人材を養成する教育機関の創設ということもまた千賀子の提案であつたようである。そうした説得が功を奏して遺産のうちから四〇万円を東本願寺に寄進することの合意がなされ、これを基金に年次経費の方は東本願寺が拠出し、かつ東本願寺が経営にあたるという提案であつた。

これをうけて大谷派当局は会議を持ち、さらに大谷光暢法主の意向も伺った結果として、北京覚生女子中学校の創

設と経営を決定していく。真宗教義による人格の陶冶と、宗教情操の函養を図るという教育方針の趣旨を立て、これらを陳家親族に示して了解を取り付けたとする。

とすれば、明確な前後関係にはなおも不詳部分はあるものの、智子夫人の訪中までにある程度は話が進んでいた可能性があり、そこへ光暢法主が先に訪れて話をほぼ決定し、最後に智子夫人が行くときにはお膳立てができていた可能性が考えられないだろうか。全部が全部、筋書き通りというわけではないが、寄附による学校設立が突然の申し出であったり、なぜかほとんどん拍子にことが運ぶ背景には、智子夫人の訪中歓迎、および智子夫人の理想とする仏教による中日友好推進とは別の、外部的要素が働いていたことを見逃すわけにはいかない。大谷派の北京進出、日中婦人の提携を掲げての実業界権益の確保、変動する日中体制への女性協力団体の創出、仏教による対中国文化工作への参画、北京における親日組織の設置、などなど、言葉を変えればいくらかもいいうちがある。しかし、つまるところは、対中国文化工作の一環を担うべく、軍部や指導者層の意向に沿って仏教者が提案し、そのゆえに採択されて実現したという一面を否定することはできないであろう。

三 開校の準備

こうして一九三八(昭和二三、中華民國二七)年四月に覚生財団が発足し、五月にはその理事会(校董会と称した)の理事長(董事長)、常任理事(董事)のメンバーが決定された(旧東本願寺教学課資料「北京覚生高等女学校創設概要」)。その当初の顔ぶれを紹介すれば、

理事長 北京市長 余晉蘇

理事 故陳覚生夫人 陳鮑蕙

北寧鐵路局主席秘書 曾榮伯

天津北寧鐵路局員 鮑賢明

天津市株式会社平林 平林千賀子

東本願寺北支開教監督 津田 賢

覚生女子中学校学監 出雲路善尊

北京軍特務機関部員 武田 熙

常任理事 北寧鐵路局副局長 黄複生

東本願寺北京別院輪番 藤井草宣

であつた。理事長の北京市長余晋蘇は、実は遠く日清戦争後の一八九八(明治三一)年に東本願寺が杭州・蘇州・南京に開設経営した、中国人向けの日本語・英語・仏教教育のための学校「東文学堂」の在籍経験者であり、日本にも東本願寺にも理解を示す親日的人物にはかならない(東文学堂については、筆者稿「東本願寺中国布教における教育事業」「真宗研究」三四所収参照。また、余晋蘇については江森一郎・孫伝釗「戦時下の東本願寺大陸布教とその教育事業の意味と実際」「金沢大学教育学部紀要 教育学部編四三」所収参照)。理事には遺産を寄附した陳覚生夫人をはじめ陳覚生の遺族が三名、東本願寺側からはことがらの仲介者平林千賀子を含めて三名、そして監督官庁の指導を受けるために軍特務機関員で興亜院文教局長でもあつた武田熙が就いている。さらに常任理事を遺族と東本願寺から一名ずつ出し、こうして理事会が形成された。学監出雲路善尊はそれまで京都の大谷中学校校長兼大谷専修学院長であつたが、抜擢されて覚生女子中学校の運営を任されることになった。また、東本願寺北支開教監督が理事を兼任することから、まもなく津田賢に代わつて当時大谷大学学監であつた宮谷法含が赴任する。北京覚生女子中学校経営への大谷派本山の力の入れようが分かる人事である。出雲路は学徳兼備の実践教育家として宗派内に知られた人物であつて、宮谷とは同郷という間柄もあつた。

校長には陳鮑蕙夫人、名譽校長に大谷智子が就任することになるが、これには中国の教育法令に従って開校する都合上、校長に日本人を置いては許可が受けられない事情も手伝ったことであつた。計画では日本の高等女学校に倣つて五年制を採用したかったのであるが、中国の制度に高等女学校はなく、止むを得ず当時はアメリカ式であつた中国の中等教育に関する法規に基づいて、初級三年・高級三年の六年一貫制の女子中学校として開校することになる。中国の子女を中心に一部日本子女も含めて生徒を募集し、日本語を第一外国語、英語を第二外国語とする特色をもつたカリキュラムが編成された。教員構成についても中国子女が中心の中国における学校であることに配慮して、中国人一〇名、日本人四名でスタートする。校地については平林千賀子と藤井草宣が興亜院文教部に強く斡旋を要請し、北京市内皮庫胡同二四号にあつた旧河北省通県師範学校の土地と廃校校舎を北京市から借り受けた。学校備品や職員宿舎も使用可能ということで、備品の補充と校舎などの補修改善を急ピッチで進めて開校に間に合わせたという。学校創立について、格別の配慮のもとに極めて多くの便宜供与がなされたことが推察されよう。

四 開校とその後の経過

こうして日中提携を旗印に掲げた北京覚生女子中学校は、構想から一年も経たない一九三八(昭和一三)年九月十七日に、補修ペンキの香りも新しい校舎において開校式を挙行した。

教育の目的は、「中国子女を教育し、東洋婦人の美德を函養して、良妻賢母たるの素地を付与すると共に、家事家政に通ぜしめ、日支提携の楔たらしめんとするに在り(先掲『設立概要』)」であつた。中国語では「使中国女子、函養東亜女子之美德、将来為良妻賢母、及能熟習家政家事、遂漸實現中日親善提携為目的(『北京覚生女子中学校概況一覽』)と表記されていた。「良妻賢母」「家事家政」という語は今日では封建的に聞こえるかも知れないが、これらは明治以降(一八六八年)の欧米的近代女子教育が日本にもたらした教育内容であり、日本の高等女学校における教育目的

として定着していた。それを「東洋婦人の美德」「日支提携」と結合させて、中国人女子教育に及ぼそうとするものであったといえよう。中国の学校教育における女子高等教育の不備を補おうとする意図をもって、とくに良家の子女に高等教育を行うことを目的としていた。

『宗門開教資料―北京覚生女子中学校―』によって開校式当日の様子を窺えば、主な来賓の顔ぶれは、

覚生財団理事長・北京市長 余晋猷

元北京市長 江朝宗

興亜院文教部調査官 武田 熙

華北日本軍特務機関長 喜多 某

東本願寺北支開教監督 宮谷法含

北京市教育局員 某

であって、講堂正面には中国国旗の青天白日旗と日本国旗の日章旗、および故陳覚生の遺影が掲げられ、中国国歌・卿雲歌に続いて陳鮑蕙校長が式辞を読んでいる。そこでは北京市行政当局・市教育局、および興亜院文教部・華北軍特務機関による特別な配慮によって創立が成ったことへのお礼が述べられ、東本願寺の熱意がそれをなさしめたという趣旨が述べられたようである。また、日中両国が不幸な干戈を交えているなかで、来たるべき平和の世を願いながら、興亜の基礎を築くための女性人材の育成指導に尽力する決意が語られた様子である。名譽校長大谷智子は出席しておらず、送った祝電の、

北京覚生女子中学校開校せらるるに当り、遙かに祝意を表し、

併せて教職員生徒諸子は益々両国親善の契を厚うして、東亜文

化建設に寄与する所あらんことを希ふ。

が真宗大谷派宗務総長祝電とともに披露された(電文は「真宗」一九三八年九月号による)。なお、平林千賀子は理事として来賓の席に連なっていた。

名誉校長大谷智子、校長陳鮑蕙、学監出雲路善尊の職掌の差違は、先掲の一九三八(昭和一三)年五月「設立概要」における実施計画によれば、

名誉校長 学校教育ノ根本方針ニ付諭示セラレ、特ニ重要ナル事項ニ関シ認可スル。

校長 主トシテ訓育ニ任ズ。

学 監 重要ナル事項ノ処理ニ関シテハ学監ノ同意ヲ求メ、特別ノ重大事項ニ関シテハ名誉校長ノ承認ヲ受ク。
学校長ヲ補佐シ、教育全般ヲ監督シ、生徒ノ入退学、職員ノ任免、会計ノ監督ニ任ズルノ外、校務一切ヲ監督ス。

であり、名誉校長の認可権や、学監の持つ教育・校務全般監督権に対して、校長は訓育担当が明示されるだけで、重要事項処理には学監の同意を要し、特別の重大事項には名誉校長の承認を要することになっている。名誉校長は大谷智子以外が就くことはなく、学監も「北京覚生財団設立寄附行為案規則」(「設立概要」に所収)第四条で「東本願寺ヨリ派遣セラレタルモノ」と定められていて日本人の職であるから、校長の陳鮑蕙は出資者ではあるものの、所詮はあるべき中国上流女性を代表する存在というに留まって、学校の運営に直接関与する権限があったとはできないであろう。しかしながら、もともと大谷智子も陳鮑蕙も教育家ではないのであり、学監に教育専門家を配置することによって進めようとした事業である以上は、止むを得なかったという面もないことはない。

かくして、初級中学第一学年に八三名、高級中学第一学年に一一名、学生数計九四名、校長以下教職員二〇名、で北京覚生女子中学校はスタートした。

その後の経過については、創立五周年に至った一九四三(昭和一八、民国三二)年くらいまでは戦争による物価騰

費に悩みながらも発展的膨張の一途をたどったようである。幸いなことに、東本願寺北支開教監督部が半年単位で本山東本願寺に送った事業報告書の大半が残存していて、それらの中に覚生女子中学校からの報告書が含まれている。日記体裁で日々の学校行事や訪問者名が書き留められ、また会計の報告もなされている。

開校五周年記念式典が名譽校長大谷智子の来校を得て営まれたのは一九四三年一〇月のことであったが、式典を控えてそのために製作されたと思われる同年六月の年次を記す印刷物の『北京覚生女子中学校概況一覽』は、最盛期と思われるころの様子を我々に教えてくれる(重要史料であるので特に本稿末尾に全文を掲載する)。それによると、陳校長以下教員三一名、内日本教員二〇名、中国人教員一〇名。他に中国人書記五名。計三六名の教職員が教育に当たっていた。理事会は校董会と称し、董事長は変わらず余晋蘇が務めるが、彼は北京市長を退いてこの当時は華北政委会建設総署督弁の職にあった。他に董事は九人で日本人五名、中国人四名。董事長が代表する形式の董事会は日中半数づつで構成されていたことになる。また、経常費予算額は財団基金から二五〇〇〇円、東本願寺補助が二三〇〇〇円、学費収入二二八〇〇円、他に付属小学校・幼稚園学費などが若干あって計八〇〇〇〇円であった。創設初年度における決算額が三〇〇〇〇円余だったことからすれば二・六倍を越す事業費である。肝心の生徒数の変遷をみると、第五年度(一九四二年度、四二年九月〜四三年八月)は四〇七名となっており、創設年度の一〇〇名足らずからは四倍を数える規模に膨張している。生徒一名当たりの経費負担額はとみれば創設時の約半分となっていて、一見するところ経営は順調に思える。生徒四〇七名中には日本人五二名・朝鮮人三一名が含まれ、都合中国人生徒は三二四名であったことになる。家庭の職業は商業が最も多く一二七名、次が政治関係五八名、工業四〇名、学校関係二八名、警察関係二五名と続く。農業が最も少ないことから、良家および中堅女子が教育対象となっていたことがよく理解される。もちろん家庭の宗教は仏教が三五七名と圧倒的であった。

一九四三年一〇月、大谷智子は大谷光暢に同行して中国東北部(満州地域)および華北の開教地巡回を行ったが、

北京に滞在した一〇月二〇日午後、名譽校長として初めて覚生女子中学校を訪れ、開校五周年式典に出席して挨拶を述べた。その訓辭とする挨拶中には、

何と申しまでも、大東亜共栄圏建設といふ大理想を実現する為には、日華が本当に心から一つになり、相い提携して生るも死するも共に力強く協力して歩むことが大切であることは、今更申すまでもありません。幸いにして南京政府更新（南京維新政府から南京国民政府に替わったこと）せられ、着々其の歩が進められて居ますことは、皆様と共に喜びに耐えないところであります。さて皆様は、日華提携の先覚とも申すべき此の榮ある学園に入学せられ、日夜諸先生方の懇なるご指導の下、学びの道にいそまれることは、此の上なき幸はせであり、其の将来の御多幸をおもふとき、お喜び申さずには居られません。しかし、私どもの前途にはまだまだ幾多の試練のあることを覚悟致さなくてはなりません。この試練を通してのみ、益々強く輝かしき榮光が私共の上に持ち来たされるのであります。皆様は、深く時局に思いを致されつつ、益々諸先生方の仰せをよく守られ、身共に健やかにいそまれ、世界の東亜民族として、女性として恥じぬ素養を積まれ、日華の提携に協力して下さる様、心から念ずる次第であります。

とあり（昭和一九年二月華北開教監督部報告書）、日中提携の先駆的事業として設立された覚生女子中学校への並々ならぬ期待が、優しい言葉使いのなかにも十分に感じられる。大東亜共栄圏建設の理想とは当時ならではの表現であるが、東亜民族・女性としての素養を積んで日中提携の実をあげる人材に育ってほしいとする熱意には、大谷智子の誠心誠意が籠もっていたとしてよいであろう。確かに中国人女性に高等教育を与える学校としては中国社会の期待にも合致していたところがある。それまで行われていた西洋式教育に替わる中国・日本式の教育を、しかも中国の教育法令に則して施そうとするのであるから、日中提携の教育施設としてユニークな存在であったに相違ない。設立時には中国でも、学校設立者の一人であって経営にあたる大谷智子が日本の皇室に縁りのある人物（昭和天皇妃の妹）であ

るとして北京市内の話題となったといい、一種格別な後押しのある日本経営による中国人女子高級学校という位置づけにあった様子である。

在籍生徒数の年々の増加を思えば、この学校が中国人社会からもある種の期待を担っていたことが類推されるのであるが、一九四五（昭和二〇）年八月一五日の日本敗戦によって一挙に廃校に追い込まれることになる。当時は学監が安藤弘に交代していたが、八月下旬には全責任を陳校長に託し、それまでの経営母体としての東本願寺の経営趣旨と、特に大谷智子の女子教育・日中提携に賭けた意志を永く留めるよう約束して、先ず日本人職員が手を引いた。あとに日本人教員と日本人生徒の処置問題が残ったので、安藤学監は東本願寺北京別院に居を移して事務処理を行った。事務処理は一九四六年三月末日で打ち切れ、同年六月二〇日段階の報告（「北支開教監督部北平別院引揚報告」）では、同年三月以降に学校は中国側に接収され、校名は改められ、陳校長も辞職して様子が一変したと伝えている。それほど、日本が深く関わった学校と見做されていたことになるであろう。文字通り事業頓挫ではあった。しかし、日中戦争期における日本傀儡政権下での特別の意向を受けた教育という点を除けば、中国における教養ある女性の育成を目指した日本による教育事業の特異な例として評価されることがあつてよい。

五 中国の教育事情から見た意味

一九三八年九月から一九四六年三月まで存在したことになる北京覚生女子中学校をめぐって、中国の教育事情および女子教育事情を考慮して存在の意味を探ってみよう。

『近代支那教育文化史』（一九四二年刊）によると、中国の教育事情は次のようであった。中華民国建国以降の近代学校教育における問題点は、アメリカ系教会学校の進出にあったという。教会学校は、教育の名義に名を借りて宗教を宣伝し、学生に強要して聖書を講読せしめ、宗教儀式を行って学校教育の本意を失する状況に至っていた。その甚

しきは、学校に名を借りて侵略を行うものであった。外国が行う教育事業は商売に同じであって流弊多く、事業の結果は殖民に近く、宗教の宣伝をなさない場合には政治的侵略が主眼であって教育はその付属品とも見える状況であったという。それに対抗する教育権回収の主張には急進・漸進の二様があったようであるが、強硬派を代表する陳啓天の主張は、教会学校であるか否かを問わず、外国人の経営にかかる一切の学校を中国人非キリスト教徒の経営に移すべきであるとするものであった。

こうした主張は一九二九年八月公布の私立学校規定に受け継がれ、例えば、外国人経営の学校は校長に中国人を置かねばならないとか、宗教団体経営の学校は宗教を必修科目にしてはならず、授業においては宗教を宣伝することを得ず、学生に宗教儀式への参加を強要し勧誘してはならない、と定められた。また義務教育政策には男女の機会均等がうたわれ、女子教育については第二次中央執行委員会第四次全体会議全会宣言に「女子教育に対しては、なかなづく慈愛深厚にして健全なる母性の養成にあるを確認すべし」という方向が目指されている。一九三八年、覚生女子中学校開設当時の中国の学制では、初等教育に幼稚園と小学校があつて、小学校は初級四年、高級二年で六歳から一歳までの六年間。中等教育に中学校があつて、初級中学三年、高級中学三年で一二歳から一八歳までの六年間。その上によりやく高等教育として大学校なら六年、専修科なら三〜四年と定められていた。

日本傀儡の北京臨時政府は民国二六（一九三七、昭和一二）年二月七日に成立したが、翌年二月三日に北京市公立中小学校職員講習会において教育方針が発表され、四月一五日に北京市教育部から同内容の訓令が發布されている。日本が中国の地に施そうとした東亜新秩序建設は、文化的工作の一環としての教育施策に先ず向けられたということであろう。その骨子は、

一 党化のための教育の排除

二 共産党容認思想の絶滅

三 欧米への依存の転換

四 道義精神の昂揚

五 実学の奨励

六 日中親善の推進

であり、その趣旨で開設された北京市経営の女子中学（初級三年・高級三年の六年制）は二校であった。

翻って日本では昭和期（一九二六年～）に入って以降、国民の思想悪化が政府によってたびたび叫ばれる風潮をきたし、『女子教育史』（一九四三年刊）は風潮対応の教育施策が次のようになされたことを記している。一九二八（昭和三）年三月の共産党員一斉検挙が千名に及び、しかも高等教育を受けた者一五〇名を含んだことから文部省が立ち上がり、建国の本義の徹底・国体観念の明徴・堅実思想の函養を掲げ、教育は国体の精華を発揚して国運の隆昌の貢獻することにあると訓令した。一九二九年六月、文部省は全国の高等女学校長を招集して思想善導の方法を検討し、思想指導のための六項目を決定した。「現下ニ在リテ女生ノ思想ハ大体ニ於テ健全ナリト雖モ、現代思潮ノ弊風ハヤガテ女生ニモ及バントスル兆ナキニアラズ」と前置きのある、

一 必要に応じて生徒の思想の調査を行って指導方針を定める

二 思想には思想をもつて対処できるよう批判力を養成する

三 国体観念の函養になお一層の工夫を凝らす

四 女性的美徳の自覚を促す

五 偉人の心境に触れさせて宗教心を啓発する

六 一宗一派に偏らない宗教講演は宗教教育とは見做さない

という内容であった。こうした思想悪化を憂える思潮は年を追って増大し、その対策として、文部省は一九三五（昭

和一〇）年十一月には宗教的情操の函養に關する通牒を發した。すなわち、學校において宗教教育を行つてはならないという従来の立場は保ちながらも、人格の陶冶に資するためには宗教的情操の函養を図ることを必要とするという新しい判断を行い、一宗一派に偏することなく、また正しい信仰を尊重するよう指導することを達したのであった。

文部大臣の示す女子教育の方針としては、一九三二年六月に「賢母タルノ教養、並ニ良妻タルノ修養」（全国高等女学校長会議訓辭）とあり、一九三四年六月には「国民道德ノ養成ト婦徳ノ函養」（同）、蘆溝橋事件後の一九三七年一月には「女子ハ、子トシテハ親ノ中ニ、妻トシテハ夫ノ中ニ、母トシテハ子ノ中ニ、真ノ自己ヲ生カスヲ以テ道トシテキタ……女子教育ノ第一義ハ、時流ノ如何ヲ問ハズ、斯卡ルマコトノ女子ノ道ノ十分ナル扶植ニアラネバナヌ」（同）とあって、母性の養成・婦徳の函養の二つはもはや定着した方針であつたといえる。日本では、一九〇〇（明治三三）年に高等女学校令が發布されて男子教育とは違う家庭婦人の養成が方向づけられて以来、一九二〇（大正一〇）年の高等女学校令改正で国民道德の養成と婦徳の函養が挙げられ、ここに良妻賢母主義教育が明確に掲げられることになって昭和期を迎えていたのだつた。女性に高等教育の門戸を開き、高度の知性と判断力をつけることを避け、家を守る女性を育成する教育となつていたのであるが、これは、女性への高度な教養教育を目指しながらも、女子教育の拡がりによってかえつて家政家事を含まずには成り立つていかなかったいきさつもあり、また東洋的な女性道德を強要する社会基盤も強かつたことと併せて考えるべきことがらではある。日中戦争の進行は、さらに、出征による男性不在の家庭における、家事家政をしながら日本社会を護る女性を要請したことであろう。女子教育の良妻賢母主義自体は欧米からもたらされた近代教育の所産であるのだが、受容後に封建道德に重ねて定着していったところに日本の特質がみられるといえる。

ともあれ、目的の一方である国民道德の函養という方面を抑えて、婦徳の函養の方面を東洋女性的美徳と布衍して教育目標に掲げたのが覚生女子中学校であつた。日本に行われる女子高等教育を中国でも施そうとしたのであつたが、

そこは傀儡政權下といえども中国内の政權であり、また中国との融和が絶対条件であったから、中国の教育法令に依拠し、中国の教育事情に合わせてことが進められたのであった。それが校長に中国人である陳鮑蕙を置いたこと、日本の五年制高等女学校をモデルとしながら中国式六年制女子中学校となったこと、の理由であった。それでも、傀儡維新政府の目指した教育六項目の内、党化教育の排除・共產主義容認思想の絶滅・欧米依存の転換・日中親善の推進の四項目を果たす存在であることをみれば、当時としては日中合作事業としての意味は十分にあったものとみなければならぬ。確かに多くの気遣いが在ったことは覚生女子中学校年次報告書からも窺われる。例えば生徒を中国籍と日本籍に分けるこの学校では、日本の行事にあたる天長節・明治節・教育勅語捧読・宮城遙拝・神社参拝などには日本人教職員および日本籍生徒だけが参加することになっていて、新年式・新年祝賀会は中国籍生徒と合同で行っても、そのあとの北京東本願寺別院参拝は日本人教職員のみで行くことにしていた。宗教の宣伝・強要・侵略的態度を厳に謹んで、中国の教育事情に適応しようとした様子が眼に見えるようである。大東亜建設とは、今日からみれば大アジア主義による英米勢力の駆逐を意図した侵略に他ならないが、アメリカ式教育の影響下にあって弊害を感じていた中国においては、それなりに受け容れることのできる要素もあったことになる。

六 日本への留学生派遣

東本願寺の経営になる北京覚生女子中学校の特色は、中国人子女に高い普通教育を施そうとしたことにあり、当時日本で行われていた女子高等教育を、極力、中国の教育法令に準拠させて実施したものであった。日本が朝鮮半島や台湾などで行った植民地教育と違うのは、中国が植民地ではなかったため、現地教育事情を優先させて行ったことである。とはいえ、第一外国語に指定された日本語は日本籍生徒学級では週三時間であったのに対し、中国籍生徒学級では週六時間であったし、日中提携を掲げての日本文化に関する教育の充実振りには眼を見張るものが在り、先述の

大谷智子名誉校長を迎えての開設五周年記念式典のあとで生徒たちによって記念学芸会と銘打って披露された成果に、それは遺憾なく発揮された。わずか約四〇分間の記念学芸会ではあったが、プログラムは、

開校五周年記念学芸会

一、日本語発表 開会の辞 高級中学三年 畢徳全

二、合唱 東亜共栄歌(中国語) 合唱部一同

蝶々行進曲(日本語) 同

三、日本語発表 対話「初対面の挨拶」 初級中学一年三組 徐淑瑛 弭鴻敏

四、中国語発表 対話「挨拶」 初級中学一年日本籍 植田幸子 吉武葉子

五、日本語発表 お話「標語」 高級中学三年 韓克賢

六、合唱 懷旧(中国語) 合唱部一同

朝だ元氣だ(日本語) 同

七、日本語発表 お話「風鈴の声」 初級中学二年二組 劉鴻敏

八、日本語発表 お話「日本の祝祭日」 高級中学二年 王靖宇 王毓芹

九、斉唱 海ゆかば 初級中学日本籍覚学生徒

十、中国語発表 閉会の辞 初級中学日本籍三年 閻世田照代

と進行し(「昭和一九年二月北京開教監督部報告」より作成)、いかに大谷智子を感じさせたかは想像して余りあるところである。

覚生女子中学校に学ぶ生徒に日本に対する馴染みを持たせることは、当初からの開設目的の一つであった。日中提携を担う人材の養成ということは、とりもなおさず、日本語が話せて日本文化に馴染みを抱く生徒を育成すること

あったであろう。その推進のためであろう、開校翌年の一九三九(昭和一四、民国二八)年四月五日には、生徒四名の訪日見学旅行団が三週間の予定を組んで北京を發ち、日本で大歓迎を受けて友好を深めた。これは修学旅行として一九四〇年四月二〇日にも第二回が実施されたが、この時の要項(「覚生訪日修学旅行団要項」)は目的に、「現代日本文化に接セシメ、日本ニ対スル認識ヲ深ムルト共ニ、興亜文化ノ基礎タル兩國親善ヲ増進セシムルヲ以テ目的トス」といい、見学予定箇所として、

神戸 湊川神社・大谷派別院

東京 宮城奉拝・明治神宮参拝・靖国神社参拝・李王邸参伺・東京帝国大学・東京女子専門学校付属高等女学校・上野動物園・上野音楽学校・実践高等女学校・日比谷公園・明治(或ハ森永)製菓会社工場・三越・浅草本願寺・東宝乃至松竹観劇・日本女子青年会館

横浜 埠頭

箱根 早雲山・上強羅・大湧谷湖尻・芦ノ湖

名古屋 名古屋城・仏教連合会尾張支部・東本願寺別院・桜花高等女学校

宇治山田 皇太神宮参拝

樫原 畝傍御陵・樫原神宮参拝

京都 京都御所・桃山御陵参拝・東本願寺・皇紀二千六百年奉讃大会・同音楽会運動会出場・清水寺・嵐山・丸物乃至大丸・日支女学生交歓会・市内高等女学校

大阪 東本願寺難波別院・大阪朝日新聞社・大阪毎日新聞社・大坂城・大阪造幣局・武田製薬会社工場・大谷高等女学校・同女子専門学校・大丸百貨店・宝塚・岩田氏(岩田惣三郎、実業家、東本願寺有力門徒)別邸
釜山 大谷派別院・釜山大谷女学校

京城 朝鮮神宮・大谷派別院・向上女学校・京城帝国大学

が挙げられている。参加者は中国籍生徒二九名、日本籍生徒三名。初級中学一年生から高級中学二年生までの混成であるところをみれば、この修学旅行は募集による参加者を組織したものと思われる。訪問箇所は大谷派(東本願寺)関係施設と観光地が多いのは当然にしても、特色は皇室関係施設および国家的神社への参拝訪問がずいぶんの数にのぼること、そして各地において女学校を訪問していることであろう。東本願寺関係施設や各地女学校では歓迎行事あるいは交歓会が行われたであろうが、皇紀二千六百年(昭和十五年がそれに当たるとした)奉讃大会やそれに伴う音楽会・運動会にも出場したというのもその時代を感じさせる。その特色を除けば、日本の一般の学校の修学旅行と大差ない行程ともいえるのであるが。

ところで、名古屋での訪問先に桜花高等女学校があったが、この女学校は東本願寺系の学校であった(現在はない)。この女学校に、翌年の一九四一(昭和一六、民国三〇)年七月二〇日、北京覚生女子中学校は初めて二名の公費留学生を送り出している。学則に明記はないが、品行方正・学業優等・思想堅実の三条件を満たした生徒の内から、覚生女子中学校卒業の後に、将来覚生女子中学校教員として奉職することを条件に日本の高等女学校への留学が認められ、その第一回留学生は名古屋桜花高等女学校に配属されたのであった。留学先は上申に基づいて東本願寺が決めており、この二名の場合は大阪の大谷女学校への留学希望に対して、何らかの事情があって桜花高等女学校に変更となったものらしい。二名の名は徐麗文・邵温珍といい、出身地は北京市と天津市で、ともに初級中学校卒業後すぐに覚生女子中学校事務助手の身分を得て留学し、日本の高等女学校では四学年に編入された。覚生女子中学校の年度は中国式の八月―翌年七月であり、六月末に卒業式を行ったから、日本では九月の第二学期からの入学という変則扱いとなったが、覚生女子中学校から学費七〇円の支給を受けて日本でも格別の配慮を与えられた。この二名は先述の一九四三年六月『北京覚生女子中学校概況一覽』の教職員表に書記として名を連ねているところから、無事留学を終え

て、約束通り見習い教員として覚生女子中学校に籍を置くことになったものであろう。

続く第二回の公費留學生は翌一九四二年七月、京都の光華女学校への二名の留學生派遣であった。「昭和一九（一九四四）年中興亜部事務概況」には「光華女子中学校留学ノ沿革」として、

一、当派経営ノ北京覚生女子中学校卒業生ノ中、優秀ナル学生二名ヲ冠記女学校ニ留学セシメ、教諭ノ家庭ニ於テ日本のナル教育ヲナス。

二、留學生ノ選定方法

北京覚生女子中学校ノ推薦ニ依ル。

三、指導ノ方法

1、指導機關ノ名称・組織 光華女学校教諭ノ家庭ニ於テ訓育ス。

2、在留期間 在学期間中。

3、指導ノ方針・方法 中国子女ニ対シ、東洋婦人ノ美德ヲ函養シ、日本精神ニ基ヅク家事家政ニ通ゼシメントス。

四、現在員数、並ニ其ノ氏名・年齢・出身地・略歴・入所年月日。 左記。

五、経 費

1、一箇年総額 金參千円也。

2、出 所 大谷派本山本願寺。

3、費 途 食費・学費・修養費・医療費・被服費等。

氏名 年齢 出身地 略歴 入所年月日

劉明明 一八 中華民國北京市 北京覚生女子 昭和一七年

中等学校卒業 (一九四七)

現在光華女学 八月一日

校在学中

金虹竹 一八 中華民國北京市 同

同

と記されている。第一回から第二回までの間に東本願寺における覚生女子中学校からの留学生受け入れの態勢が整ったとみられるのであり、受け入れは光華女学校へ、そして費用は東本願寺の負担とされたことになるであろう。

この二名の留学生のことは「光華女子学園五十年史」(一九九〇年刊)に記事があり、そこでは、

覚生女子中学校からの留学生

姉妹校ともいうべき北京覚生女子中学校から、昭和十七年の二学期、二人の留学生が入学してきた。東本願寺興亜局招聘の留学生として来日した金虹竹・劉明明の二人である。二人は覚生の初級中学(当時の中華民国中央教育法では初級中学三年、高級中学三年であった)の卒業生であった。本校では三年生として受け入れている。

金虹竹は昭和二十(一九四五)年三月の卒業生として記録に残っているが、劉明明のほうは卒業生名簿にその名は残っていない。くわしいことはわからないが、十九年の夏に家庭の事情によって急遽中国へ戻り、そのまま再来日がでなくなったものと思われる。

金虹竹は台北において、商社の責任ある地位についており、昭和五十五(一九八〇)年の本学園創立四十周年には、同窓生たちの招きによって来日し、記念式典に参加している。劉明明のほうは北京に居住しているらしいということではあるが、その消息ははっきりしない。

とし、巻末年表の一九四三(昭和一七)年の箇所に八月二十日として「覚生中よりの留学生編入学」と記録している。一九八三(昭和五八)年刊行の覚生女子中学校同窓会世話人太宰不二丸(もと同校幹事)による「回想―五十年」は、

同人と日本人卒業生一名が同年八月に台湾旅行を行って金虹竹ら十数名の台北在住の同窓生と同窓会を開催し、三〇年ぶりに旧交を温めることができて相互交流が再開されたことを伝える。

『昭和一九年中興亜部事務概況』は「留学生ニ関スル件」の箇所に、北京覚生女子中学校卒業生の留学について、「本年第二回卒業生ヲ送りタルソノ中、金虹竹ハ京都光華女学校五年生ニ編入、目下優秀ナル成績ヲ収メツ、アリ。」とある。劉明明についての記載がないのは、一九四四年（昭和一九年度中）に在籍しない状況にあったことを示すのであろうか。

東本願寺による覚生女子中学校卒業生の受け入れ態勢の整備は、実は東本願寺がいわゆる「共栄園」と称されたアジア地域からの留学生受け入れに熱心であったことの一環に組み込まれたことを意味する。この時期、たとえば中華民國から四名、中国東北地域（満州地域）から四名、内蒙古地域から二名（蒙古族）、タイから一名の計十一名の外国人が東本願寺経営の大谷大学に留学（別に中国東北地域出身者二名が大谷中学校に留学）していた。彼らは現地開教監督の推薦による留学生で、諸経費は東本願寺が負担し、「大東亜民族ニ対シ、仏教ヲ通ジ日本精神ノ函養ニ当ル方法トシテ、嚴格ナル寮制度、並ニ華道週一回教授、及ビ見学旅行ヲ行フ」という指導方針・方法をもって、日本の訓育をなすとする「東亜寮」に住まわされた。東亜寮の位置づけは、

鮮（朝鮮）・満（満州）・華（中国）・泰（タイ）各国ヨリ来留シ、日本精神ヲ仏教ノ研鑽ニ由リ究メント志シ大谷大学ニ勉強中ノ留日学生ニ、愈々日本的訓育ヲ深カラシムル可ク家庭的ニ寮ヲ設置シ、語学ト親交ニ多大ノ効果ヲ収メ、今年目出度ク男子留学生全員、業成リテ夫々勇躍帰国シ、共栄園確立ノ心的紐帶タラムトノ決意ノ下ニ活躍中ナリ。

によく表れており、卒業に際しては旅行を行って伊勢神宮に参拝させて「国体ノ尊嚴ノ弥高キコト」を知らしめ、諸大寺に参詣させて「仏教文化ノ精髓」に触れしめ、もって「興亜永遠ノ礎石タル神社仏閣ノ森嚴サ」を感得せしめ、

「日本ノ興隆極マリナキヲ体得」せしめようとしていた(「同事務概況」)。覚生女子中学卒業生の日本留学は光華女学校教諭宅に寄留するものであったが、日本精神の体得と興亜・共栄圏建設のための人材の養成という点で、基本的には各国男子留学生と同列であった。覚生女子中学校生徒有志に行われた日本国内見学旅行の目的も、日本文明と日本宗教に感化されるよう引率された点では男子留学生の卒業旅行と大差はない。これらは真宗大谷派(東本願寺)に限ったことではなく、各宗派が「共栄圏留学生養育」として行っていた。しかし、昭和天皇妃の妹を宗主夫人(大谷智子)に戴く真宗大谷派の方針と行動は、率先垂範による国策準拠であった。中国における覚生女子中学校経営の目的が、中国子女に高等普通教育を施すという基本から日本の教育による日本精神の鼓吹へと徐々に偏っていったところには、時代情勢とともに大谷智子を擁する大谷派の特性が力として働いたものとみてよいであろう。

七 さらなる専門教育への志向

開校五周年の一九四二(昭和一七)年度には、「北京覚生女子中学校概況一覽」によれば生徒数は一〇クラス四〇七名を数えていた。開校時(一九三八年度)の生徒数四クラス九四名からは、年々増加の一途をたどってきた。四〇七名の内訳は、中国籍三三四名(内一五名は「満州国」籍)、朝鮮籍三一名、日本籍五二名であり、中国人子女を対象に教育を行うという目的は達成しつつあった。中国人子女を集め得た背景について、東本願寺の中国開教に伴う教育事業に関心を寄せる中国人研究者の一人で筆者の友人でもある孫伝釗は、次のように指摘する(孫伝釗学位請求論文未刊稿「中国布教の最終的挫折―戦時下の東本願寺中国布教とその教育事業の意味と実態」)。一九三七年秋以降の日本軍による北京陥落・南京攻略により、蔣介石率いる国民政府は重慶に移った。それに伴って、日本軍の占領地となった華北地域の多くの国立大学とその名門付属校は西南・西北の奥地に移転し、北京における教育機関の水準が低下する状況となった。北京における臨時政府親日要人・元北洋政府高官、および中流以上の家庭の子女たちの高い水準の

女子教育への期待と要望は、真宗大谷派の活動が日本軍追隨の様相を示すところがあったにも拘らず、日本系学校への入学を将来的手づるあるいは便宜的手段として選択するところがあった。急激に増えた日本人居留者の子女の就学先を求める状況もあった。こうした事情によって覚生女子中学校の発展は支えられ、一九三九年には生徒数は五〇〇名を越える規模に達したが、これは同年到北京にあった私立翊教中学校が廃校となり、余晋蘇らの斡旋で同校の設備品を覚生女子中学校が買い取り、生徒の一〇〇余名も編入生として受け入れたからであるという。一九四五年には生徒数は約七〇〇名にまで増加していた。

規模の拡大自体は覚生女子中学校にとって望ましいことであった。夜間日本語学校(一九三九年開校、生徒約一〇〇名)・幼稚園(一九四一年開園、園児約二〇〇名)・夏期幼児保育園・付属小学校(一九四四年開校、生徒約三〇〇名)などを順次に併設し、現地北京での様々な教育的要望に応じて盛況をみせていった。しかしながら、日中戦争の影響は一九四三年秋以降、中国にも物価高騰となって波及し、急速に学校経営を圧迫するようになった。「昭和一九(一九四四)年度中興亜部事務概況」によれば、一年間で物価は五・二〇倍に及んで日中両国人の生活を脅かしているという。教員の生計を守るために臨時物価手当を支給するなど、あらゆる学校経費支出の膨大化に喘いでいると窮状を訴えている。たとえば一九四三年秋に一冊三六銭であったノートが、一年後の秋には一冊六円八〇銭に値上がりしていた。授業料の方も止むなく一年で四倍に引揚げられていたが、それでも他校に見られる学費増大による生徒数減少はないと報告しているから、その経営力量には並々ならぬものがあったと類推されようかと思う。

生徒数の増加はそのまま経費膨張に直結する。そこで当面の経費節減のために考えられたのが覚生女子中学校日本籍クラスの廃止であった。元来、覚生女子中学校は中国人子女の教育のための教設であって、居留日本人の要望など諸般の要望によって日本人子女を受け入れてきた。日本籍生徒の数が増えたこと、および日本人には日本の高等女学校に準じた格別なカリキュラムが必要ということで日本籍クラスができてきた経緯があった。たてまえの上では日中

生徒がまったく同じ条件下に学ぶということであったから、そうした理想とは少しずつ乖離するという道をたどってきたのであった。予想されることではあったが、この日本籍クラス廃止案には外からの抵抗が強かった。経営母胎である東本願寺は廃止に賛成していたが、「広く諸方面の関係を精査いたしたる結果」として、将来のために重要であるから暫定的に存続させるということに決している。「軍方面、興亜院方面」が廃止に好意を示さない反面、「中国側関係者」は廃止に好感を示す状況であると当時の学監安藤弘は苦しい立場を記録している(「同事務概況」)。日本籍クラスを存続させた教育上の事情は、中国の学制における高級中学は大学予科に過ぎない現況にあった。大学に予科は設けられておらず、いきおい高級中学がその役割を担う形となっており、高級中学を卒業して進学を目指す者は直ぐに大学へ入学して四年間就学する制度であった。そのような状況下では、中国学制で決められている男女共通の授業時間数・使用教科書にしたがう限り、研究を目指す一部の女性以外には極めて不適当とするのが日本人の考えであり、女性としての特性に合った、いわゆる良妻賢母主義女子教育が徹底できない憾みがあった。また、高級中学卒業後の日本の高等学校入学にも対応できないとされた。そのために、覚生女子中学校の日本籍クラスへの依存と期待は廃止反対の意見となって噴出したのであった。それだけこの時期、日本籍クラスが中国籍クラスには見られない日本の教育の場に変じていたことが窺われるところではあるが、日本籍クラス廃止の意向の強い北京市の教育界や市当局との折衝を通じて、何とか女性に対する新しい学修の道への公認を取り付けようと苦心していくことになる。

日本籍クラス存廃問題は、特に廃止によって行きどころを失う日本人高等教育志願子女の受け入れ先を考えることに繋がっていった。すなわち、研究者や官僚エリート養成のための大学の予科と化している三か年の高級中学よりは、初級中学卒業生に対して一―二年の就学で足りて、なおかつ女性のための実際的な教育課程を備えた学校を新たに構想したのである。北京市教育界に日本が持っている女性教育のノウハウを持ち込もうとする構想であった。

その構想は「覚生女学院文学部創設」案として結実する。その「整備類算二関スル説明」(「同事務概況」所収)には、

当北京ニ居リテハ、事変(一九三七年蘆溝橋事件)前ニ於テハ英米文化ノ施設極メテ盛大ニシテ、ソノ英米文化ノ中国子女ヲ風靡シタルコトハ、マコトニ燎原ノ火ノ如クナリシガ如シ。カク中国子女ニ対スルコノ文化面ヨリシテノ英米浮華思想ノ注入ニヨリ、中国ノ国民ヲ墮落ニ導カント努力スル彼等ノ事業ハ、今日ニ於テモ尚ソノ影響ノ残存スルモノ甚ダ多く、職トシテ子女教養ノ任ニアルモノノ浩嘆尚ホ且ツ手ヲ下スベキノ道ナキヲ感ゼシムルマデニ、現下尚ソノ悪影響ヲ残セリ。

在中国日本ノ機関モ亦、コノ点ニツキ深く留意スル所アリ、華北ノ政府機関ト相計リ、ソレヲ教育施設ノ廢立換改ニツキ努力セラレツ、アルモ、現下ハ尚ホ未ダ大東亞戦争(第二次世界大戦)決戦ノ期ニアリテ、文化教養の方面ノ改廢ニツキテハ尚多クノ為スベキ所ヲ残セルト信ズ。

而シテカクノ如キノ改廢ノ急速ナル實現ニ対スル希望ハ、独リ教育当事者タル我等ニ於テノミナラズ、中国政府要人ヲハジメ在華日本諸機関要人、将タ北京ニ於ケル中外ノ諸名士ハ勿論、子女ヲ有スル各家庭ニ於テモソノ要求ハ極メテ大ナルモノアリ。然シナガラ、英米ガ留置シタルコノ思想的惡ノ華ヲ驅逐スルニ当ッテハ、先ツ何ヲ以テコレニ代置セントスルカガ問題ノ要点トナラザルベカラズ。而シテ、コレガタメニハ実ニ古来ノ東洋諸文化ガ集合凝固シ、ソノ精神ヲ極メタル我が日本文化ノ真髓ニ依ルニアラザレバ、何物カガコノ英米文化ノ惡ノ華ヲ驅逐シ得シ。

当学院ハ、実ニ北京ニ於ケル唯一日本人経営ノ学園ニシテ、マコトニ自ラ進ンデコノ中国子女ノ思想的救済ニ当ラザル可カラザルノ立場ニアリ。若シコノ任ヲ一日怠ルノ状アルナラバ、実ニコレ皇國(日本)ニ対シ、又新生中国ニ対シ、又大東亞各国ニ対シ、ソハ極メテ忠ナラザルモノト云ハザルヲ得ズ。

モトヨリスノ如キ目的ニ対シテハ、幾多ノ機構ト人材トアリテコレヲ為スコント雖モ、今日コノ決戦期ニアリテ、物、人トモニ不足ナルノ時、職ニソノ任ニアリ、時ニソノ場所ニアルモノ、豈手ヲ拱イテ傍觀以テ可ナルモ

ノアラシヤ。当学院ガ既ニ女子中学ヲ畢ヘタル学生ニ対シ、ココニ専門部ヲ開設セントスル所以ハ、コレニヨリ中国子女ニ対スル文化教育ヲ更ニ一歩進メテ、以テ大東亜ノ女性、新生中国ノ女性ニ今ノ全々新シキ文化教養ヲ与ヘ、以テ嘗テ彼等ヲソノ浮華ニ依テ魅了シ、以テ滅亡ノ淵ニ誘惑セントシタル英米ノ害毒文化ヨリ救済シ、新生東亜ノ新女性ノ覚悟ヲ確立セシメントスルモノニシテ、マコトニソノ所以アルモノト云ハザル可カラズ。

本文学部ハ、コノ趣意ノモトニ、其第一歩トシテ踏ミ出サレタモノニシテ、其ノナス所ハ現在極メテ小ナリト雖モ、ソノコレヲ達成スルノ日アラバ、盖シ以テ天恩ノ万分ノ一ニモ応エ奉ルヲ得可シ。

と、いかにも時代を感じさせる文言が並ぶが、要は覚生女子中学校の卒業生により実用的な日本型良妻賢母主義に基づく教育を施すことに主目的があり、中国子女の思想的改造のことはあくまで開設をスムーズに運ぶための表現であったと読みたい。たとえ中国子女に思想改造を及ぼす想いがあったにしても、それは所詮なし得ないことがらであった。それにしても、覚生女子中学校開校から七年の実績は、専門部という中国では特異なシステム（日本では既に施行ずみのもの）を日中両国女性に対して持ち込もうとするまでの日本の影響を与えたことになる。もとより文学部（専門部）開設は、日本人子女教育徹底化の要請から起こったことであった。先の文に続く「文学部創設要項」は、専門学校を志向して差し当たり文学部を設置するとしており、国文（中国文学）科・日文（日本文学）科の二つ（それぞれ定員四〇名）を一九四五（昭和二〇）年九月一日より開設するとしているが、ここでの機会均等はむしろ日本の教育の門戸に対するものであることに気がつくであろう。日本の敗戦により文学部併設は実現しないままに終わったが、先の趣旨を見る限りでは、一九三七年当初に見られた、中国教育制度に拠りながら日中の教育内容の擦り合わせを行い、それによって中国子女への教育を保証していこうとする気運は失われている。より高度な専門教育を新たに始めるといっても、その実は教養教育以外の裁縫などの実務的家事家政を重視する日本型女子教育を志向したことでしかなかったように思われる。敗戦で計画が断ち切られたことは、むしろ日中合作を表榜してきた覚生女子中

学校にとっては良かったこととしなければならぬであろう。

八 姉妹校としての光華女子学園

『光華女子学園五十年史』は、中国北京における「覚生女子中学校の創設が、本学園設立の契機となる」(序説三ページ)といい、中国訪問から帰られた「御裏方(大谷智子)は、覚生と同じく、仏教精神にもとづく女子教育の場を京都にも設けたいと願われた」(第一章五ページ)ので、光華女子学園を創立することになったと述べている。両校が姉妹校の関係にあることはこれだけで十分理解されようが、日本敗戦によって覚生女子中学校が廃校となるまでの両校の歩みを年次を追って並べてみよう。

(年次)

(覚生女子中学校の歩み)

(光華女子学園の歩み)

一九三八年

四月 理事会結成

九月 開校

一九三九年

四月 訪日旅行

夜間日本語学校開設

一九四〇年

四月 訪日旅行

一九四一年

四月 幼稚園開園

七月 日本へ留学生派遣

一九四二年

八月 日本(光華高女)へ留学生派

八月 覚生中より留学生編入学

七月 学園設立申請

九月 学園設立認可

同月 光華高等女学校設置認可

四月 高等女学校開校

四月 現校舎へ移転

遺

一九四三年 一〇月 開校五周年式典

一九四四年 小学校開校

二月 保育所開設

四月 女子専門学校開校

一九四五年 九月 文学部（専門部）開設予定

四月 専攻科開設

一九四六年 三月 廃校

開設はもちろん覚生女子中学校が先で、その日本版が光華高等女学校であった。付属幼稚園・小学校ともに覚生において先に開設され、光華女子学園では保育所開設からの出発となった。光華女子学園における付属幼稚園設置は戦後かなり経過した一九六五年、付属小学校設置は一九六八年まで遅れる。ただし、卒業生のための上級学校である専門学校（専門部）の設置については光華女子学園が若干先んじた。これは日本側の事情が優先した結果とみるべきであろう。つまり、「高度の専門的技術」を伴う「国家のお役に立つ為の学問」（『光華女子学園五十年史』第五章六四ページ、光華女子専門学校第一回入学式大谷智子総裁挨拶より）を女性の身につけさせる必要が生じたことによるのだろう。その直接の原因は五年制の光華女子高等学校が卒業生を輩出する年次を迎え、さらなる高次元の教育を望む者があったことと思われ、時局に合致した設置意図を示すことで認可を受けたいきざつを類推することができよう。覚生女子中学校における文学部（専門部）設置が、経営的にも大変な中で敢えて進められた背景は、光華女子学園の動向を反映させて、覚生においても懸案の高等教育に乗り出す方向を探った動きであったとみることも可能なのではないだろうか。中国の教育事情を睨んで、中国側の女子教育を補うべく配慮しながら、権勢を強めている日本勢力に受け容れられる設置案を提示せんとするところに、いいようなない苦心が察せられるような気がする。覚生女子中学校を姉

とし、光華女子学園を妹とする当初の姉妹関係は、光華女子学園の方が高等女学校として整備されていたことによつて、やがて留学生の光華高等女学校途中編入による受け入れが可能となり、また一足早くより高次の専門学校設置に成功したこともあつて、一九四五年には姉妹の立場が逆転しつつあつたことであらう。

ところで、両校の姉妹関係は実のところ光華女子学園という学園の名称にまで及んでいる。今日、光華女子学園では校名の由来について、真宗正依の經典の一つである「観無量寿経」に説かれる十六想観の第二観にあたる水想観を説く一節、

一一の宝の中に五百色の光あり。その光、華のごとし、また星月の虚空に懸処せるに似たり、光明台と成る。

を典拠として「光、華のごとし」から採つたとしている(光華女子学大学・短期大学・真宗文化研究所編「聖典」五七ページ)。浄土を観想する手だてとして、限りなく透き通つた水がたたえられてあることを想い、そこに七宝が光を入り交じらせて静かに輝いている様子を想えといい、その光は華のようであり、また空にかかる星や月の光にも似る、という箇所である。それはそれで、もとより典拠とするにふさわしい經典上の表現がなされている箇所である。しかしながら、読み下した文章では「光、華のごとし」と美しい響きのある一節となるのであるが、「観無量寿経」の漢訳經典においては、

一一宝中、有五百色。其光如華、又似星月 懸処虚空。成光明台。

とあつて(『真宗聖典』東本願寺刊、九六ページ)、「光如華」であつて「光華」と二文字が続く表記ではない。わざわざ意識してから採つたことを想えば苦心になお敬意を払いたいとは思ふが、この苦心には別の理由が潜在するというのが筆者の考えである。

光華女子学園設立の発端は、何といつても中国北京における覚生女子中学校の創設に感激した真宗大谷派法主夫人大谷智子に負うところが大きい。そして、そのなさんとするところは仏教精神に基づく日中合作の女子教育であつて、

日中の子女が国境の隔てのない理解を結んでいくことを理想としていた。中国における覚生女子中学校の誕生を喜ぶの余り、日本にも同様の教育施設が創れるのではないかと思ったのが始まりであったはずである。当初から姉妹校を目指していたはずである。したがって、そこには何らかの中国に通ずる意匠が考慮されたとして不思議はない。筆者は「光華」の校名そのものが日中友好の証として命名されたのではないかと推察する。

ここに、「斯文」という中国文学を中心とする東洋学の雑誌の、一九三八（昭和一三）年に刊行されたうちの一冊（第二〇編第八号）がある。それには「支那（中国）の国歌「卿雲歌」に就いて」と題した武田熙による論文が掲載されている。武田熙とは、先述したように覚生女子中学校の認可を担当し、北京覚生財団理事（覚生女子中学校校董）の一員にも連なった当時の北京在任日本軍特務機関部員であり、一九四三年の開校五周年時にもまだ理事にあって日本北京大使館文化局調査官を勤めていた人物である。論文は、一九三七年一月に設置された北京臨時政府支配下における中国国歌制定の政治的いきさつ、および制定された国歌歌詞に関する歴史的文学的考察を記すものである。まず中国における国歌制定の歴史を略説し、「尚書大伝」に典拠を持つ「卿雲歌」が臨時政府下の国歌として一九三八年三月二八日付けで制定されたことについて述べる。それによると、一九二二（中華民国元）年の共和制実施によって国歌制定の論議が起り、「卿雲歌」と「立国記念歌」の二つが候補となったが決せず、一九一五年に別の「中国雄立宇宙間」という歌が国歌と定められた。ところが帝政的気配の見える袁世凱政権下に定められたことから普及せず、一九二〇年に古歌である「卿雲歌」に決せられるに至る。これに対して広東を本拠とした蒋介石軍による国民党は「南政府国歌」を別に決め、さらに北上して一九二七年に南京に国民政府を樹立して「卿雲歌」を取り消し「国民革命歌」を奨励し、さらには「国民党歌」を国歌制定までは国歌に代えると公布したのであった。日本軍が南京政府を攻略したのが一九三七年末であり、それによって北京臨時政府・南京維新政府が傀儡的に誕生した結果、反蒋介石の気運から「国民党歌」を斥けたのは自然の成りゆきで、替わって国歌に制定されたのが「卿雲歌」ということなの

である。

「卿雲歌」は、「八伯歌」「帝載歌」と併せて『尚書大伝』卷一の虞夏伝に見えるもので、舜帝が位を禹に譲ろうとして群臣と唱和した歌と伝え、この歌を先ず帝が唱え、次に八伯がこれに和して歌い、終わりに帝がまた唱えて結んだという（『漢詩大系』集英社刊による）。古詩として『古詩記』『古詩源』にも載せられているが、その文言には、

卿雲歌

卿雲の歌

卿雲爛兮

糺縵縵兮

卿雲爛足り、糺縵縵たり。

日月光華

旦復旦兮

日月光華あり、旦復た旦。

（訳）五色の瑞雲、目もあやにかがやき、ゆるやかにみだれただよう。その中であって日月は美しい光を放つ。それは今朝も明朝もかわることなく。（一、二句を以て、百官の朝廷に和集するにたとえ、三、四句をもって、禹の徳の美なるに比し、暗に讓位のことをほめかした。）

とあり（訳などは『漢詩大系』）、ここに徳ある人を日月の光の輝くさまにたとえて「日月光華あり」と表現している。武田熙は先掲論文においてその一句々々についても考証していくが、「日月光華」の句については、

日月光華

日月光華トハ、些ノ浮雲ノ見ルコトナク、太陽ト月トガ天地ニ光彩ヲ放ツノ謂。清明ノ象デアル。漢書地理志ニ載サレテキルヤウナ災異ガナイノデアル。

前代教育部制定ノ時（一九二〇年）ノ解ニ曰ク「日月ノ中華民國ノ光照スルヲ云フ」ト。

此句ハ永世不滅ノ日月ハ昭々トシテ一切ノ黑暗ヲ掃尽シ、終ニ人間ニ到リテ文物彬々、万象ヲ明朗化シテキル貌ヲ歌ツタモノダ。其ノ心ハ陽ナルガ故ニ日ヲ以テ表サル、日本ト、陰ナルガ故ニ月ヲ以テ表サル、支那（中國）トガ、常ニ光華明彩デアル。従ツテタトヘ固有ノ理想精神及ビ道德ガ曇ラントスルコトアリト雖モ、永世

不滅ノ日月タル日本ト支那トハ合作ニヨル光昭ヲ以テ、凡ソ陋習ト積惡トヲ払拭シ去リテ、誠ニ能ク之ヲ光復シ、毎二一片ニ杞憂ナク、東亜ノ人心尤モ清明、爽快デアルトノ謂ヲ述ベタモノデアル。コレハ新シキ中華民國ノ国民的特性デアル。

と解説し、中華民國は、平和への理想を持ち儒教的徳を倫理的基礎としながら、東方合作によって維持される国民性の国であり、新しき国民精神による自新・新民・新国・新外交が、人民楽業・国家安泰・友邦和親となるとする。自新が向上発展を生み、それが永久なる天壤無窮に連なるとするのである。日本側によるご都合的解釈であるが、当時はそのように、日中合作を中国古典に照らして日本側に都合がいいように、合理的に説明することが求められる両国関係であったことが知られるであらう。傀儡北京臨時政府は表向きは中華民國政府なのであるから、傀儡とされる批判をかわして、いかに日中合作が素晴らしいことなのかを内外に宣伝する必要に駆られた時節であったことは、容易に類推されるところである。日月を日本と中国に充てる付会は当時ならではといえよう。武田熙は著書に「支那学概論」がある東洋学者でもあった。

北京覚生女子中学校創設に携わった方による執筆であるために詳しい記事を持つ「宗門開教資料―北京覚生女子中学校」には、一九三八年九月一七日開校式の様子を記して次のようにある。

講堂の正面にはや、大型の青天白日旗（中華民国国旗）と日の丸の国旗が、仲良く肩を並べるようにして掲げられてあった。講堂に入るや両国旗の色合いが、今日は格別まぶしく眼を射た。正面のや、左方上に、故陳覚生先生の元氣なお姿の遺影が掲げられてあった。広やかな講堂の天井には、幾条にも交互に万国の小旗が張られてあって、慶祝のムードが弥が上にも高まるのを覚えた。

司会の凜とした開式の詞が、講堂内に響いた。やがてピアノの音階に合せて、中国々歌に次いで卿雲歌、

卿雲爛兮 糺縵縵兮

日月光華 旦復旦兮

「群臣と共に太平の世にあらわれる瑞雲の氣を楽しむ」虞舜の歌のメロデーが、新入生百二十余名の生徒達によって斉唱されて、こゝに歴史的な記念すべき開校の式典が初められた。北京語の美しいリズムカルな旋律に氣を惹かれた。五百名に近い(参列の)人々の耳にも、同様に快く美しく響いたに違いない。

かく斉唱が終って、心持ち緊張したかに見える、陳鮑蕙新校長の式辭が初まった。

ここにいう中国国歌は「国民党歌」であつたかと推されるが、続いて斉唱されたこの年三月制定の北京臨時政府制定の新中国歌にあたる「卿雲歌」に対する感慨の方がはるかに深かつたのであり、この歌にこそ日中提携合作の意趣が籠められていたことになろう。

このように、北京に在つた軍勢力を背景とする日本勢力の意向と親日的中国要人との合作によって、今まさに新しい形の政治が進められようとする時を象徴する一つのモデルケースとして、覚生女子中学校の開校が記憶されているのである。光華女子学園の名の「光華」とは、直接には日本と中国とがいつまでも平和な状態に輝き続けることへの願いを受けとめて学園名に採用したものであるだろう。時局に対応した、進取の氣鋭に満ちたネーミングだったとしてよいのかもしれない。

さて、「光華」の語の学園名への採用にはもう一つの側面があることも忘れてはならない。覚生女子中学校開校は何度も繰返すように一九三八年(昭和一三)九月であり、光華女子学園の設立申請は翌三九年七月であつた。日本の文部省は、西洋近代思想の根底をなす個人主義を排して万古不易の国体(天皇制)を明らかにし、その本義を國民が体得すべきであるという立場から、一九三七年五月に「国体の本義」という一五六ページの冊子を刊行してすべての教育機関に配布していた。共產主義・無政府主義はもとより、民主主義・自由主義も根底には国体に合わない個人主義があることに注意を促し、思想上、社会上の混乱を防ぐことに目的があつた。巻頭に「本書は国体を明徴にし、

国民精神を函養振作すべき刻下の急務に鑑みて編集した。」と意図を掲げている。一九三〇年代初めからのファシズム潮流の産物である。

その『国体の本義』の第一「大日本国体」を説く箇所(二二ページ)に、『日本書紀』を引用して、

伊弉諾ノ尊、伊弉冉ノ尊共に譲りて曰く、吾れ已に大八洲国及び山川草木を生めり、何にぞ天下の主たるべき者を生まざらめやと。是に共に日神を生みまつります。大日靈貴と号す。(一書に云九、天照大神、一書に云く、

天照大日靈ノ尊。)此の子光華明彩しくして六合の内に照徹らせり。

とある。

天照大神は日神又は大日靈貴とも申し上げ、「光華明彩(ひかりうるは)しくして六合(あめつち)の内に照徹(てりとほ)らせり」とある如く、その御稜威(みいつ)は宏大無辺であって、万物を化育せられる。即ち天照大神は高天ノ原の神々を始め、二尊の生ませられた国土を愛護し、群品を撫育し、生成發展せしめ給ふのである。

と述べ、「光華」が天照大神の威光を表わす語であるという使用法を示している。当時の教育機関はこの『国体の本義』を奉ずることを求められたので、そこに使われており、かつ国体を表現する語は格別な意味合いを持っていた。新たに学園を設立するに際して、中国にあつてまた日本にもある「光華」の語が選ばれたことの政治的思想的背景はこのあたりにあつたのではなかったかと思うところである。

思えば、光華女子学園総裁大谷智子は久邇宮家の出生で、邦彦王の三女であつた。六人兄妹の内の三番目にあたる長女良子は昭和天皇に嫁いで皇后となり(現在は皇太后)、四番目であつた次女信子は華族三条西公正に嫁し、五番目の三女智子はこれまた華族に連なる東本願寺大谷光暢の夫人となつたのである。大谷光暢との結婚は一九二四(大正一三)年五月であるが、翌年には当時真宗大谷派法主の地位にあつた光暢の父、大谷光演が巨額の負債のために限

定相続を行って讓職し、二五年一〇月には光暢が本願寺二四世法主を継職する。嫁いでわずか二年半の智子は突然のように法主夫人となり、「お裏方」と尊ばれる立場になってしまう。「宗門の母」的な存在である。法主夫人の職として大谷婦人法話会と称する一八九〇(明治二三)年発足の宗門女性教化団体の会長職があったが、智子夫人は一九二六(大正一五)年一〇月には会長として、婦徳の函養と報恩の生活のための婦人の自覚と奮起を促す五か条を示した(『真宗大谷派婦人法話会五十年史要』)。その条文は、

一、他力の信心を決定して、女人成仏の素懷を遂ぐべき事。

一、報謝の称名怠りなく、常に皇恩・師恩を忽諸にすべからざる事。

一、子女の教養に心を用ひ、ねんごろに仏種を扶植すべき事。

一、勤儉家を治め、まめやかに内助の務を全すべき事。

一、温良貞淑よく女子の本分を守り、社会平和の中心たるやう心がくべき事。

であつて、女性を母性と家政従事者に限定し、またのちには戦時動員していく意味で今日的には批判される(山内小夜子「大谷派教団における「婦人教化」の問題―戦時下における「婦人教化」体制とその活動」『解放の真宗』第二号など)が、中・上流婦人による社会教化を目指す団体であつてみれば止むを得ないところであつた。何よりも、中・上流婦人の組織を束ねてさらに拡大していく力が智子夫人にあつたことが重要であり、それは一九三三(昭和八)年には大谷派夫人連盟の結成となつて表われる。各地にばらばらにあつた大谷派内の婦人法話会の類を一挙に統合したもので、事務総長阿部恵水による「婦人連盟結成の論達」(『真宗』所収)には、

現時、思想の動乱、社会に不安ますます激化し、殊に婦人の徳性日に退廃の傾きあるのみならず、文化の興隆、社会の完成、その一半の責務必ずや婦人の双肩に在るに鑑み、今回の御法要(覚信尼六五〇回忌)を好機とし、ここに総門末婦人を糾合して婦人連盟を結成し、婦人運動の第一線に進出して社会浄化に奉仕し、いささか以て

報国の一端たらしめんとせり。

とあるが、久邇宮家出身ならではの、そして昭和皇后の妹ならではのカリスマ的な組織力を有していたことへの期待があったことは確かである。

一九三八年二月、前年暮れ方の戦禍も新しい華北の地を智子夫人は慰問視察をなし、その途中の天津・北京で日華仏教婦女会の結成に立ち会い、同時に覚生女子中学校設立の話をまとめてきたのである。帰国報告は三月一〇日に東本願寺の大寝殿においてなされたが、このときの報告「皇軍慰問より帰って」(「光華抄」所収)はラジオによって全国中継されている。華族出身の高貴な女性が、しかも女性の身でありながら血腥い戦地をいち早く訪れ、東本願寺法主夫人として、女性の戦時におけるありようを戦地報告と共に全国に向けて語ったのである。大日本文学報国会から人気女流作家の林美美子が中国戦線入りし、「女丈夫」の戦地報告として新聞を騒がせたのは二月初めであった。話題性のみならず、智子夫人の出自、そして皇后の妹であること、東本願寺裏方であること、が各界の意見や世論の形成に与えた影響は大きかったと見るべきであろう。智子夫人であったからこそできた戦地慰問であり、だからこそ実現できた覚生女子中学校設立であったのである。

そうした意味で、「光華」という学園名には、中国向けの意味、日本国家向けの意味、真宗大谷派宗門内向けの意味、の三つがあったとできるであろう。中国向けには「尚書大伝」中の「卿雲歌」の「日月光華」、日本国家向けには「国体の本義」の日本書紀に由来した「光華明彩」、宗門内向けには「観無量寿経」の水想観にみえる「光、華のごとく」、のそれぞれ「光華」の文字の持つ意味である。したがって、光華女子学園には覚生女子中学校姉妹校としての顔、国体を表現した教育機関としての顔、仏教精神による女子教育機関としての顔、があったとしてよいと思う。經典に根拠を求めながら「光如華」とあるところを「光華」と抜き出したことの意味は、中国的「光華」と「国体の本義」的「光華」との擦り合わせの結果なのである。日本敗戦によって三つの顔の二つが消滅し、仏教精神による

宗教的情操教育を重んじながら高い教養教育を施すとする顔だけが、今日まで続いてきたのであろう。覚生女子中学校姉妹校としての国際性や、国家的需要に応じた教養教育・専門教育の充実、などが忘れられた二つの伝統を今日の活かす道なのではないかと密かに思うところである。

おわりに(覚生女子中学校跡地の現況)

覚生女子中学校は一九三八年九月に開校し、四五年八月に実質閉校し、翌四六年三月に廃校となった。日本による北京占領の落とし子のような存在にも見えるが、その遺したものは様々であったということができようかと思う。閉校後の中国人生徒・教師の動向も気になるところであり、その後中国社会から不当な扱いを受けていなければよいがと祈るばかりである。幸いに同窓会が組織された様子もあって、懐かしく旧交を温めあった人たちもあることは喜ばねばならないが、その幸せに暮らす人々が台湾在住に偏っているらしいことには複雑な思いを隠せない。

さて、筆者は、一九九六(平成八)年八月到北京師範大学への短期留学生を引率して同行した大谷大学の山田知子教授・渡辺洋専任講師に、北京覚生女子中学校跡地の現地踏査を依頼して報告を受けた。それより先、筆者は大谷大学に留学中の中国仏教協会派遣の留学生を通じて、中国仏教協会に覚生女子中学校関連の情報の収集を依頼したことがあった。その結果、覚生女子中学校跡地は現在では北京師範大学の実験中学(付属中学)として使用されていることが分かっていった。そこで、付属中学ならば系列校なので訪問調査も可能なのではないかと先掲の両先生に調査を委託した経緯がある。ここに、その報告の一端を紹介しよう。

場所は西単(シータン)と称される地域の一隅であり、天安門や人民大会堂・中南海からも近い西長安街に面した民族文化宮の裏手の辺りである。今も「皮庫胡同(ピークフートン)」の街区表示があり、北京師範大学付属実験中学校が建っている。付近での聞き取りや実験中学校総務部長の張群生氏が両先生に應對して下さった結果、次のようなこと

が分かった。

覚生女子中学校廃校後は、一時、文華女子中学校となったことがあり、その当時は以前のままの校舎を使用していた。その後、北京師範大学付属女子中学校を経て、一九七八年に男子校を合併して現在の付属実験中学校となった。覚生女子中学校時代を偲ばせる遺品については、校門の門柱が、今は塀から取り外され、また文字も削り取られて校地の隅に積まれてはいるが、石に刻まれた模様でそれと確認される(同窓会発行誌などに校門の写真が載っていたので)。また、理科実験棟四階にある資料室の生物標本棚の一つに「覚生」の焼印があることが確認された。べつの標本棚には「文華」という文華女子中学校当時の焼印もあったという。備品の一部が現存することが知られるところである。なお、持参した覚生女子中学校時代の建物配置図(旧東本願寺教学課資料にある)によって対照したところ、校門の位置が当時から裏手に移動しており、また建物の配置も大きく変わり、建物でそのままのものはまったく無いことが知られた。運動場だけがそのままということが出来る。

その後、筆者自身も一九九八年七月に実験中学校を訪れる機会があり、同じく張総務部長、および芬建貨氏にお会いして改めて確認を行ったが、先記の両先生の調査を越えるものではなかった。

ここまでの北京覚生女子中学校をめぐることからについて、本来であればまとめを書くべきところである。従来ならば、筆者は「国策に準拠して大陸侵略の一斑を担った文化工作の一つ」と結論づけたと思う。それはその通りに違いないのはあり、当時の北京における政治機構が、興亜院下の華北連絡部に臨時政府までもが指導される体制であって、華北連絡部の傘下に文化局があり、そのまた下部に文教班が位置して教育政策を司っていたことを思えば(機構図は筆者稿の「近代における日本仏教のアジア伝道」「日本の仏教」②アジアの中の日本仏教 法蔵館、一九九五年刊所収、の二二八―二二九ページに掲げている)、文化工作の一斑というほかは無いのは当然かと思う。要は、積極的に日本軍事勢力

に加担したのか、または組織された体制の中では無理からぬことだったのか、などを問うべきであり、ここではかなりの独断的努力をしたことの方をむしろ評価したい気持ち強い。文化局文教班は思想・教育・宗教を担当しており、覚生女子中学校を統括した東本願寺華北開教監督部もまた文教班に指導される立場であった。宗教・教育の二面において指導を受けるなかで独自の教育的理想を追求することは至難の技であったとしてよい。覚生女子中学校が掲げた女子教養教育の理想は、各方面のそれぞれに微妙に異なる要請に応えるという意味で、当初から破綻を内在する事業であっただけに、「日本の皇室に関係あるお方がなさっている女子教育事業」ということが、中国側にも日本側にも特殊事情と観念されて維持継続が約七年に及ぶ事業継続を可能にさせたように思う。そこに、大谷智子が中・上流婦人のあるべき教養を、教育を通じて一般にまで注入したいとの熱望が働いていたとすれば、そこにはそれなりの純粋な意志があったと評価してよいと思う。手放して評価するものではないものの、宗教と教育に懸けた熱意まで否定することはないものと考ええる。その他のことがらの歴史学的評価については、各説各項において行っているので改めて繰り返すことはしない。

末筆となったが、この小稿は一九九六―九七(平成八―九)年度に光華女子大学真宗文化研究所研究員にご採用戴いての、テーマ「日中戦争下北京における中国人女子高等教育の試み―東本願寺系覚生女子中学校について―」の研究成果の一部である。研究遂行の途上、真宗文化研究所あるいは光華女子大学図書館に多大の便宜を賜うことができてこまでくることができた。また、「光華」の出版のひとつである「卿雲歌」についての文献所在に示唆を戴いた、大谷大学の佐藤義寛先生にも特に記して感謝したい。真宗文化研究所への研究成果原稿の提出が大幅に遅れ、多方面にご迷惑をお掛けすることになったことも合わせ、ここにご高配には感謝し、お詫びすべきには幾重とも陳謝申し上げて筆を擱きたい。

〈參考史料〉

北京覺生女子中學校概況一覽

民國三十二年六月

文牘處編製

校址：・西城皮庫胡同二十四號

北京覺生女子中學校印

電話：・西局二五四六號

校史略

中華民國三十二年六月

民國廿七年春日本東本願寺大谷智子夫人來華遊歷目觀事變後中日兩國一般情況以爲當此世變日亟欲求兩國永久和協倘藉教育力量感化就學之青年自必事半功倍尤以青年婦女於興亞大業更負有相當使命爲適應時勢需要亟宜成立一女子中學以善鄰協和提倡東方固有美德爲宗旨藉養成婦女中堅人材作興亞之基礎卓識遠見極邀中日有識者之推崇

適前北寧鐵路局長陳覺生夫人以陳公生前曾爲中日和平奔走爲貫徹遺志響應興學計劃慨贈鉅金用期早日觀成又承陳公生前友好石田榮熊少將東本願寺北京別院藤井靜宜及中日名流熱心贊助董事會於以組成公議以覺生名本校蓋爲紀念陳公也公舉大谷智子夫人爲名譽校長陳鮑蕙夫人任校長並聘日本教育專家出雲路善尊先生任學監進行設校於九月十七日舉行開學典禮京津名流中日地方軍政長官咸興蒞校訓話各方垂望之殷於此可見一斑

成立迄今計已五載其間事實經過多有足紀以篇幅所限茲特分別年月摘其梗概述而以告關心本校之往事者

民國廿七年四月校董會組成公舉余晉蘇先生爲董事長武田熙黃復生藤井靜宣潘毓桂宮谷法合陳鮑蕙出雲路善尊諏訪義讓曾榮伯平林千賀子鮑賢明諸先生分任董事

全月價買河北省立通縣師範學校遺留傢具並即遷入該房（西單皮庫胡同）內開始辦公出雲路善尊齊金鎧先生到職籌備設校各事宜全時接辦通縣師範附小更名爲覺生女中附小

今年七月七日呈奉教育局第四六三號指令校董會准予立案今月十五日教育局六四四號指令設備完善准予開辦招生全月奉教育局公函准予撥借校舍即進行與財政局簽借房契約

今年九月一日開課十七日舉行創校開學典禮余市長喜多特務部長名流江朝宗宮谷法含齊樹芸田村留藏先生等蒞會者達二百餘人時錄取學生因遵奉中央教育法令僅招收初高中

一年級學生八十名初中日籍學生十五名中等學校日華女學生相聚一堂同窓砥礪以本校為始親善融和于有望焉

十月購買島津洋行教授用儀器標本掛圖等運抵本校共價萬元廿八年二月附設日語學校開學錄取學生百名三個月修滿結束
今年四月五日本校組織女學生訪日見學旅行團由校長

學監率領學生四十四名赴日往返三週餘我國中學女生團體赴日旅行者以此為矯矢在日友邦各界熱烈歡迎文化名勝遍覽無遺

今年六月廿日友邦李王殿下蒞校參觀賜予嘉獎及紀念品今月廿一日函請各小學校長來校參觀學生成績展覽頗多贊賞

今年八月中國駐朝鮮領事館保送在鮮留學生六名人學九月一日第二年度新學年開始錄取初高中一年級新生百六十名連同舊有學生計二百四十餘名

廿九年四月廿日本校第二回訪日團學生三十二名赴日見學

五月九日教育局第一三八二號指令中學校成績優良准予立案六月六日轉奉教育總署教學第一二九號指令中學校准予備案七月購入翊教女子中學校理化儀器標本掛圖等價八千四百元七月十三日函准翊教女子中學一二二年級學生免試准予入學

九月一日第三年度新學年開始錄取一年級新生百九十名連同舊有學生計共三百五十名九月廿七日學生制服樣式規定制作簡易樣式整齊莊重

十二月廿二日在校召開董事會余市長主席討論本校今後發展計劃各董事對本校一般成績認為滿意各慨贈鉅款以資補助三十年四月廿九日幼稚園開園式（園兒皆係日人子女）三十年六月末第一屆畢業生初高中合計一〇六名七月廿日派定第

一屆公費留日學生二名東渡

三十一年二月學監出雲路善尊先生榮轉東本願寺教學部長新任學監安藤弘先生到職三十一年六月末第二屆畢業生初高中八十六名八月第二屆公費留日學生二名東渡

三十一年九月本校第五年度新學年開始新入學生達二百名以上爲本校歷來招生新紀錄十月中本校附設華籍兒童幼稚園成立開園

以上略記本校六載以來教育一般其間辱承各方指導曷勝感謝今後當更盡心以教育建國興亞爲宗旨努力行進尚祈各方賢達勿吝指教俾有所遵循是爲本校師生全人翹企者也

創設北京覺生女子中學校設立綱要

第一 要旨

以北寧鐵路故局長陳覺生遺產之一部、組織日華人之中國財團法人、承陳覺生遺囑、及得其生前信仰之日本東本願寺協助、以增進中日提携爲目的、創設中日女子教育機關、但以教育中國女子爲本位。

第二 教育目的

使中國女子、涵養東亞女子之美德、將來爲賢妻良母、及能熟習家政家事、遂漸實現中日親善提携爲目的。

第三 校址

北京西城皮庫胡同二十四號。（校舍係本市公產由市公署財政局撥借）

第四 基金

故陳覺生之夫人陳鮑蕙及其嗣子陳正大捐助三〇四、〇八〇元、并東本願寺每年援助大約三五、〇〇〇元

第五 校董會

依照法令規定組織爲直接監督指導本校之最高機構其組織章則別定之

第六 學校

爲達成右記使命設立女子中學校及附屬小學校及幼稚園

北京覺生女子中學校校董會定章

第一條 本會定名爲北京覺生女子中學校校董會

第二條 本會係以北寧鐵路故局長陳覺生遺產一部分承故人遺志與東本願寺協助中國設立女子中學教育中國女子爲

宗旨

第三條 本會事務所設在西城皮庫胡同二十四號覺生女子中學校內

第四條 本會之資產額總括如下：一、現在捐助金額。二、現在動產。三、以後對於各方面捐助本會之一切財產。

第五條 本會財產中之土地及建築物等不動產不得任意典賣

第六條 若因國家或團體之需要本會不得不售出所有不動產時得以賣却價購入相當之不動產或儲蓄之不得作其他支用

第七條 本會之議決機關爲總會董事會

第八條 本會所有職員如下：一、董事長一人。二、董事若干人

第九條 如捐助本會財物者其本人及子孫並創辦本會出力人員得享有出席總會參加決議之權

第十條 董事將具有前條資格者之姓名製作名簿置於本會事務所

第十一條 每年三月份開總會一次由董事會招集之關於本會之事務會計改選職員等事項均由總會決定之總會招集之期

及目的應於相當期間以前通知各會員

第十二條 董事長認為有開會必要時得招集臨時總會

第十三條 認為有開董事會之必要時得由董事長招集之

第十四條 董事如逾半數以上若請開董事會時即可招集之

第十五條 董事會得審議本會之重要案件董事如有諮詢應詳細解釋答復說明意見

第十六條 總會或董事會開會時如出席人數未滿三分之二以上者不得提議又議案須經法定出席人數之半數以上贊成者方為有效之決定

第十七條 董事長由常務董事中互選之

第十八條 董事長任期為二年

第十九條 董事由總會推選任期為二年得合議處理本會之事務

第二十條 本會之職員為名譽職

第二十一條 為達到本會之目的設立北京覺生女子中學校

第二十二條 本捐助行為之規定經總會決議後再得監督官廳之認可方得改正變更之

第二十三條 本定章用中日文字繕訂之若遇有疑議時應依照日文

第二十四條 本定章由本會成立之日起施行

北京覺生女子中學校校則

第一章 總則

第一條 本校以教育中國女子之為本位、養成東亞女子美德使通達家事家政將來為賢妻良母之基礎而為中日提携之楔子為目的。

第二條 本校定名為北京覺生女子中學校。校址在北京西城皮庫胡同二十四號。

第二章 學科課程

第三條 本校修業年限為六年。(高中三個年初中三個年)

第四條 本校所定授業課目依照中國教育法令規定之

第三章 學年及休假日

第五條 自每年八月起至翌年七月止為一學年。

第六條 每學年分為兩學期如下：・前期(即第一學期)自八月至翌年一月。後期(即第二學期)自二月至七月。

第七條 本校放假日如下：・一、星期日、
二、中國慶日、
三、開校紀念日、

四、春假(四月中) 五、暑假(七月初至八月下旬)
六、寒假(二月中)、

(以上均依照教育局命令規定之)

第四章 入學及退學

第八條 入學資格須高等小學校及初級中學畢業、或同等以上程度、而身體強健、且經考試及格者方可入學。

第九條 志願入本校者、須填具本校所製定報名書、附考試費及最近半身像片、畢業證書或成績證明來校報名。

第十條 入學試驗課目如左：・一、學科試驗 二、口試 三、身體檢查

第十一條 經考試收錄者、須填具本校所製定之入學願書及保證書由父兄及保證人連署之。

第十二條 因病或其他不得已事故而退學者、須由連署保證人呈明學監、再經校務會議議決後、方為准許。

但因病請假過一星期者(七日)、須附具醫師診斷書。

第十三條 有下列各項之一者、本校得使其退學。一、成績不良無進步者。

二、操行有欠缺者。

三、請假一個月以上者、或曠課 小時者。四、不繳納學費者。

第五章 學費及同學會費

第十四條 本校學費每學期 高中三十五圓 初中三十圓 同學會費五元。(同學會規則別定之)

第六章 進級及卒業

第十五條 每學年課程終了或畢業之成績、由平時成績及學期末次考試成績酌定之。(詳章依教育法令之規定)

第十六條 本校畢業生、得由本校授與畢業證書。

第十七條 考試・學期考試_{第一學期末}學年考試_{第二學期末}臨時試驗。畢業試驗。

第十八條 升級及留級・一、考試及格者升級。二、請假超過授課時間三分之一者留級。

第七章 獎勵

第十九條 品行端正學術優秀者、或有特殊善行者、本校得授與獎狀、或獎品、或特別優遇。

第二十條 本校校則自公佈日起施行

附則 中學校職制

名譽校長 東本願寺大谷智子夫人。

職員 校長一人 故陳覺生之夫人陳鮑蕙女士。學監一人 爲東本願寺派遣。
以下幹事、書記、教員、通譯各若干名

北京覺生女子中學校現任職教員一覽表 民國三十二年六月

職別	姓名	性別	籍貫	學歷	担任学科	到校年月	備考
校長	陳鮑蕙	女	北京市	北京女子師範學校		二十七年四月	
學監	安藤弘	男	日本東京	日本京都帝國大學	修身	三十一年二月	
幹事	太宰不二九	男	日本岐阜	日本大谷大學	歷史	三十年九月	
幹事	小谷國太郎	男	日本福井	日本福井師範學校	日語	三十年二月	
文牘	齋金鑑	男	北京	北京私立華北大學	習字	二十七年四月	
通譯	李竹君	女	北京	東京女子高等師範學校	華文	二十七年九月	
教員	本多善英	男	日本東京	日本早稻田大學	修身	三十一年九月	
教員	藤高冬子	女	日本石川	日本同志社女子專門學校	日語	三十年二月	
教員	山口堂綱	女	日本大阪	日本大阪英和塾	日語	三十年四月	
教員	新郷法澄	男	日本東京	東京帝國大學	教育學	三十年四月	
教員	袴田育子	女	日本千葉	東京唱歌學校	音樂	二十九年十一月	
教員	橋本愛子	女	日本岡山	華道池坊家元入門	生花	二十八年四月	
教員	渡邊瑞枝	女	日本富山	日本體操學校女子高等科	體操	二十九年九月	
教員	小幡ユキコ	女	日本熊本	東京女子專門學校	裁縫	三十二年四月	
教員	孫天民	男	北京	國立北京大學	地理	二十八年九月	
教員	張祖蔭	男	河北景縣	北京私立輔仁大學	理化	二十九年三月	
教員	趙春庚	男	北京	國立北京大學	史地	二十九年九月	
教員	舒恩培	女	北京	國立北大女子文理學院	國文	二十七年九月	
教員	李宗琦	女	北京	國立北大女子文理學院	體育	二十七年九月	
教員	于蓉生	女	河北景縣	國立北京女師學院	國文	二十九年九月	
教員	楊若枏	女	江蘇吳江	上海神州女學院	國文	二十八年九月	
教員	馬秀卿	男	河北昌黎	北京私立輔仁大學	化學	三十二年二月	
教員	陸還玉	女	江蘇太倉	國立女子師範學校	生物	三十二年二月	
教員	唐玉衡	男	廣東中山	武昌文華大學	英文	三十年二月	
教員	金恒銘	女	北京市	私立競成女子職業學校	勞作	二十八年九月	
教員	錢迪明	女	上海市	北京中國大學	圖畫	二十九年九月	
教員	李鴻德	女	河北滿城	北京私立輔仁大學	數學	三十一年九月	
教員	岳溫增	男	河北大興	河北省立通縣師範學校	華語	三十一年九月	
教員	田崇璣	女	河北霸縣	河北省天津女子師範學校	華語	三十一年九月	
教員	王瓊瑤	女	四川儀隴	國立北京女師學院	國文	三十一年九月	
教員	麻惠民	女	山東平原	北京市立國術館	國術	三十一年九月	
書記	修志英	女	河北唐山	本校高中畢業		三十一年九月	
書記	龔梅珍	女	河北天津	北京兩吉女子中學校		三十一年九月	
書記	孫士英	女	北京	北京幼稚師範學校		三十二年二月	
書記	徐麗文	女	北京	名古屋櫻花高等女學校		三十二年五月	
書記	邵蕙珍	女	江蘇武進	名古屋櫻花高等女學校		三十二年五月	以上計三十六人

北京覺生女子中學校校董會董事一覽表 民國三十二年六月					
職別	姓名	性別	籍貫	現在任職	備考
董事長	余晉餘	男	浙江紹興	華北政委會建設總署督辦	
董時	武田 熙	男	日本北海道	日本北京大使館文化局調查官	
全	黃復生	男	廣東	新民會中央總會人事局局長	常務董事
全	新鄉法灌	男	日本福島	東本願寺北支開教監督	常務董事
全	曾榮伯	男	四川	青島市公署總務局局長	
全	鮑賢明	男	廣東中山	天津市第一警察分局局長	
全	高澤量京	男	日本樺太島	東本願寺北京別院録事	
全	平林千賀子	女	日本滋賀	實業界	
全	陳鮑蕙	女	北京市	本校校長 中日婦人親和會幹事	
全	安藤 弘	男	日本東京	本校學監	以上計十人

民國三十二年度經常費收支預算略			
歲入		歲出	
財團基金利息	25,000 ^円	薪俸	38,000 ^円
東本願寺補助	23,000	工餉	3,000
中學學費	22,800	辦公費	8,000
附小學費	5,200	設備費	10,000
附設幼稚園	1,000	附小支出	12,000
官所補助		幼稚園支出	4,000
私人補助		清貧獎學金	2,000
新設備費	3,000	新設備費	3,000
合計	80,000	合計	80,000
說明：以上中學小學幼稚園合計數			

中學部各年度經費支出數及歷年學生班級平均負擔及職教員人數一覽表 三十二. 六.

年度順序	項目別 年度別	經常費總額		全校 班級 學生數	平 均 額 每一班 每一學生		備 注	中學職教員	職別	籍別	性別
第一年度	民國廿七年度	三〇、九五七円	〇五	四班	七、七三九円	二六		二十一人	職 六 教一五	華一六 日 五	男 九 女一二
	昭和十三年度			九四名	三二九	三三					
第二年度	民國廿八年度	四六、三八三	八五	八班	五、七九七	九八		二十九人	職 五 教二四	華一九 日一〇	男一二 女一七
	昭和十四年度			二三九名	一九四	〇七					
第三年度	民國廿九年度	六五、五五六	六五	一二班	五、四六三	〇五		三十三人	職 六 教二七	華二一 日一二	男一二 女二一
	昭和十五年度			三四〇名	一九二	八一					
第四年度	民國三十年度	五五、九八〇	六二	一二班	四、六五五	〇五	三〇、七一三一、 三九個月分	三十三人	職 六 教二七	華二二 日一一	男一四 女一九
	昭和十六年度			三五〇名	一五九	九〇					
第五年度	民國三十一年度	六七、〇〇九	三〇	一〇班	六、七〇〇	九三	會計年度變更每月 由四月開始	三十六人	職一一 教二五	華二五 日一一	男一二 女二四
	昭和十七年度			四〇七名	一六四	六四					

每人每學期費用						
級 別	初 中			高 中		
	一年級	二年級	三年級	一年級	二年級	三年級
學 費	30	30	50	35	35	35
雜 費	3	3	3	3	3	3
體育費	2	2	2	2	2	2
衛生費	無	無	無	無	無	無
書籍費	自 購	自 購	自 購	自 購	自 購	自 購
宿 費	(30)	(30)	(30)	(30)	(30)	(30)
膳 費	時 價	時 價	時 價	時 價	時 價	時 價
保證費	無	無	無	無	無	無
制服費	自 購	自 購	自 購	自 購	自 購	自 購
實驗費	無	無	無	5	5	5
合 計	35	35	35	45	45	45

學生籍貫統計表					
地名	人數	地名	人數	地名	人數
河北	101	福建	4	北京市	103
山東	24	廣東	4	天津市	5
山西	4	廣西	1	青島市	2
河南	2	雲南	1	南京市	4
江蘇	19	四川	1	漢口市	4
安徽	5	陝西	2	廣州市	1
江西	4	甘肅	1	滿州國	13
浙江	9	綏遠	1	日本	52
湖北	3	寧夏	1	朝鮮	31
湖南	2	貴州	2	合計	407

學生家長職業統計表					
職業別	人數	職業別	人數	職業別	人數
政界	58	學界	28	自由職業	25
農界	20	商界	127	賦閑	84
工界	40	警界	25	合計	407

學生家庭信仰					
教別	人數	教別	人數	教別	人數
佛教	357	基督教	4	無宗教	34
回教	10	天主教	2	合計	407
現在在校學生數（日華女生計60人）					
歷年畢業人數情況（高中）					
升學	服務	家居	死亡	總數	
13	10	6	2	31名	

[illegible]

二龍路

北
東
南
西

附屬小學

運動場

局察警二內

新皮庫胡同

北京市社會局救濟院

[illegible]

說明

【主要参考文献】

- 【光華女子学園五十年史】 光華女子学園 一九九〇年刊
- 【光華抄】 大谷智子著 実業之日本社 一九四〇年刊
- 【宗門開教資料―北京覚生女子中学校―】(原題「覚生」) 北京覚生女子中学校同窓会 一九七九年刊
- 【回想―五十年―】 太宰不二丸著 太宰工芸 一九八三年刊
- 【旧東本願寺教学課資料】 大谷大学図書館所蔵 (未刊)
- 【女子教育史】 桜井 役著 増進堂 一九四三年刊
- 【对支文化工作草案】 宇田 尚著 改造社 一九三九年刊
- 【近代支那教育文化史―第三国对支教育活動を中心として―】 平塚益徳著 目黒書店 一九四二年刊
- 【近代支那教育史】 陳青之著 柳沢三郎訳 生活社 一九三九年刊
- 【近代教育史(Ⅰ)】(中国篇に海後勝男「中国教育の近代化」を収載) 誠文堂新光社 一九七九年再版刊
- 【中国教育百科全書】 北京・海洋出版社 一九九一年刊
- 【日本近代教育史事典】(「女子教育」「宗教教育」に約一〇ページずつを割く) 平凡社 一九七一年刊
- 【斯文】(雑誌) 第二〇編第八号(武田熙「支那の国家「卿雲歌」に就いて」を収載) 一九三八年刊
- 【国体の本義】 文部省 一九三七年刊